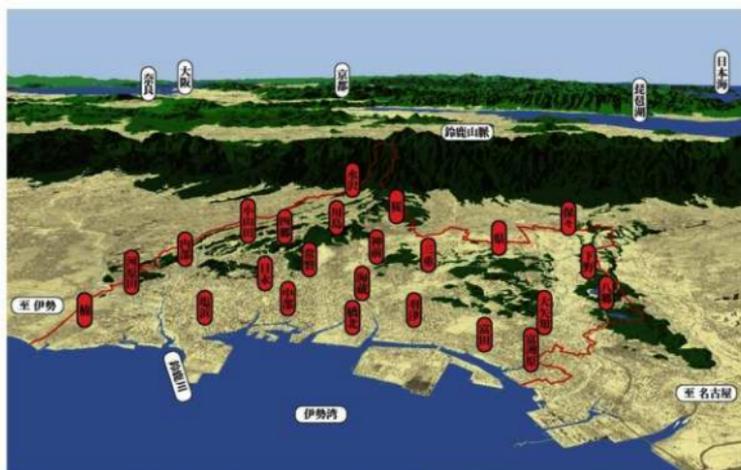


第4章 四日市市の歴史文化の特徴

1. 地区ごとの歴史文化

本市では、24の地区市民センターが設置され、その地区単位でまちづくりが行われています。それぞれの地区は、明治22(1889)年の町村制施行で誕生した旧町村を基本とした区域であり、それぞれの自然環境や社会的環境、歴史的背景をもとに、独自の歴史文化を有しています。地区単位で、歴史文化に関する活動が行われ、資料等としてまとめられています。

以下、地区ごとの歴史文化の特徴をまとめます。



市内の各地区の鳥瞰位置図

(1) 中部地区（共同、同和、中央、港、浜田）



東海道の道標（複製）（南町）



大入道山車



末広橋梁（旧四日市港駅鉄道橋）

①東海道四日市宿

江戸時代には、東海道五十三次の43番目の宿場町として栄えました。東海道の往来が活発になる近世以前より、市場町としてにぎわっており、宿場町となったことで、より商業のまちとして発展しました。町並みは、東海道に沿った北町・南町、東海道と交わる浜往還に沿った堅町・中町・浜町を中心に形成されました。また、幕府の直轄地として代官所が置かれ、絵図によると、周囲に漆をめぐらした防衛的な施設でした。平成11（1999）年の発掘調査により、木の橋脚や護岸施設とともに漆跡が見つかり、多量の陶磁器や木製品等が出土しました。地区内には、本能寺の変の際に、大坂の堺から三河に戻る際に徳川家康が陸路か海路か迷ったとする思案橋の伝承があります。

②近代産業と四日市港

四日市港は昔から天然の良港で、15世紀ごろには湊としての姿が形作られたといわれています。幕末から明治初期にかけて伊勢湾内最大の商業港となりました。しかし、安政の大地震による被害で、船の入港が困難となってきました。それでも、明治3（1870）年には東京までの定期貨客船が就航します。その後、稲葉三右衛門が明治6（1873）年に改修事業を始め、10年以上の歳月を経て、稲場町・高砂町の埋立を行いました。その後、度重なる災害に遭いながらも発展を続け、明治26（1893）年から三重県が大規模な修築事業を行い、このとき築かれたものが今に残る潮吹き防波堤等の四日市旧港港湾施設で、国指定重要文化財に指定されています。明治32（1899）年には国から開港場の指定を受け、国際貿易港となります。四日市港の近代化は近代産業を後押しします。第一国立銀行四日市支店が浜町に置かれ、四日市製紙（後の富士製紙）や四日市製油（後の九鬼産業）、四日市電線（後の住友電装）等、多くの産業が起業します。また、四郷をはじめとする市内各所での繊維産業の発展に伴い綿花、羊毛の代表的な輸入港となります。ただし、旧港は防波堤のみで大きな船は沖合に停泊し、小さな船による荷物の積み下ろしが行われ、県議会でも問題視されました。明治43（1910）年に四日市を含む東京・大阪等の8港が第二種十港湾の選定を受けると、現在につながる大規模な修築が行われました。戦後には特定重要港湾に指定され、海岸部への石油化学コンビナートをはじめとした工業都市としての発展にも寄与することになります。

③室町時代からの市

承元（1207）年、鴨長明の『伊勢記』に「浜村」という地名が出てきます。これが後の四日市を指すものといわれています。文明2（1470）年には浜田に築城した田原実作守忠秀により、領内の殖産振興をはかるために市場を形成したとされます。四日市と称して毎月4の付く日の定期市が始まり、これが「四日市」の地名の起りです。市内では、現在も多くの定期市が開かれていて、なかでも三滝川慈善橋市場は市内で最も古い歴史があるといわれています。

④赤堀三家

応永年間（1394～1428）、田原孫太郎景信が上野国赤堀庄（上野市街の中心にある赤堀）から移り赤堀城を築き、一帯を赤堀一族が治めたと伝えられています。景信の二男である秀宗が赤堀城を継ぎ、羽津城主の長男盛宗、浜田城主の三男忠秀をあわせて赤堀三家と呼ばれ、勢力をのびたと伝えられます。忠秀は現在の鶴森神社・鶴の森公園に浜田城を築き、浜田城の西にあった東海道を東に移し、また東海道と港が交わる大道を開いて市場を形成し、城下に現在に続く市街地としての基盤をつくったとされます。地区内にある建福寺（ほんぶく）は室町時代前期に開基された寺院で、赤堀一族の菩提寺といわれています。

⑤祭礼・行事の民俗文化

諏訪神社の例大祭である四日市祭は、江戸時代の初期に始まり、「東海の三大祭り」とまで称されるにぎやかな祭りであったといわれています。四日市空襲により「大山車」や「鑓」は焼失しますが、終戦1年後の昭和21（1946）年9月25日・26日・27日に従前の諏訪神社の例大祭である四日市祭が復活しました。途中、奉納行事が中止になることもありましたが、伝統的な祭礼を復活させようと、平成9（1997）年より「秋の四日市祭」が開催され、舞獅子や「鑓」が奉納されるようになり、平成14（2002）年の諏訪神社鎮座800年記念の年からは、例大祭として10月第1日曜日に行われています。一方、昭和39（1964）年からは市民の祭典として「大四日市まつり」が始まり、大入道、鯨船、大名行列等の市内の代表的な民俗行事が披露されています。

⑥菰野道の起点

菰野道は、四日市宿の中心である札の辻から、菰野町菰野へつづく街道です。札の辻から港をつなぐのは浜往還であり、堅町・中町・浜町と町並みがつながっています。菰野城下町と四日市宿の往来は頻繁で、藩主の参勤交代も菰野道を通って四日市に至り、東海道に合流して江戸へ向かったといわれています。旧街道沿いには、西町延命地藏等、かつての街道の姿を感じさせる文化財が残っています。

⑦四日市港へつながる鉄道の発達

各地から四日市港への産業関連輸送を主目的として、鉄道網が整備されていきます。本市における近代産業の発祥の地である四郷と市内を結ぶために、四日市あすなろう鉄道（あすなろう）の前身である三重軌道が大正元（1912）年に開業しました。また、藤原岳の石灰岩を原材料として作られるセメントを四日市港へ輸送することを主目的に、昭和6（1931）年には三岐鉄道三岐線（旧藤原鉄道）が開業し、現在もJR四日市駅から港への引込線が存続しています。四日市港の千歳運河には、跳開式鉄道橋「末広橋梁（旧四日市港駅鉄道橋）」が架けられ、国指定重要文化財に指定されています。

(2) 橋北地区



萬古神社



工場夜景（大正橋）



J R関西本線の三滝川橋脚

①四日市萬古焼の産地

昭和 54（1979）年に国の伝統的工芸品として指定された「四日市萬古焼」の主産地です。幕末に山中 忠左衛門が東阿倉川の唯福寺住職田端 教 正の海蔵庵窯から手ほどきを受ける等、20 年の研究を重ね、明治 3（1870）年に水車町（現浜一色町西）に本格的に開窯しました。そのほか、堀友直、川村又助、水谷寅次郎らも萬古焼の発展に寄与します。その後、四日市港や鉄道の整備に伴い、萬古焼が海外に輸出されるようになり、急速に地場産業としての基盤が築かれました。萬古神社は、萬古焼の祖である沼波弄山が祀られ、境内には山中忠左衛門の碑があります。昭和 38（1963）年からは神社周辺で、毎年 5 月に「四日市萬古まつり」が開催されていました。

②東海道及び街道沿いの集落形成

江戸時代に東海道が整備されると、街道筋に人家が建ち並び、また四日市宿の御助郷として人馬の提供も行われるようになりました。街道沿いに創業した天保年間（1830～1844）からの店である文蔵の餅屋があり、文政年間（1818～1829）からの嶋小の団子は現在も続いています。

③工場地帯（コンビナート）

四郷地区の実業家 10 世伊藤伝七は、明治 19（1886）年に三重紡績株式会社を創設し、明治 21（1888）年には浜町に本社・工場がほぼ完工、現在の三滝公園では大正 13（1938）年に新浜地内の東洋紡績ができ、第二工場も操業を開始しました。昭和に入ると軍需産業の進展に伴い、昭和 18（1943）年に戦時下での計画造船のため、浦賀船渠株式会社（浦賀ドック）の造船所設立を目指し、午起地先の海岸埋め立てが始まりました（敗戦により中止）。

昭和 30 年代には午起海面で大規模な埋め立てが行われ、昭和 38（1963）年に第 2 コンビナートが本格的に稼働しました。現在は、工場夜景が本市の観光資源として発信されています。

④鉄道

地区内には現在、J R 関西本線と近鉄名古屋線が通ります。近鉄名古屋線の沿線には製陶業者の工場や卸問屋が建ち並んでいます。J R 関西本線は、明治 23（1890）年、関西鉄道が拓殖駅から延伸した終着駅として開業しました。昭和 6（1931）年に午起駅を設け、午起海岸の海水浴客のために夏季のみ仮停車場を設けました。利用客の減少により昭和 23（1948）年に廃止されました。また、三岐鉄道三岐線（旧藤原鉄道）が富田駅から国鉄四日市駅までに入り入れるに伴い、2 代目の午起駅が昭和 27（1952）年に開業、昭和 39（1964）年に廃止されました。三滝川橋脚は、J R 富田浜駅から四日市駅間が複線化に伴い利用されているもので、往時のレンガ造りの一部が残っています。

(3) 海蔵地区



東阿倉川イヌナシ自生地



海蔵川桜並木



御厨飽良河神社の獅子頭

①四日市萬古焼のはじまり

国の伝統的工芸品として指定されている「四日市萬古焼」は、文政12(1829)年に唯福寺の住職であった田端教正が、江州信楽の陶工上嶋庄助を招いて寺の近傍海蔵庵の地に窯を築き、その付近の土を採って製造を始められました。後に四日市代官多羅尾氏の御用窯となり、この技術が山中忠左衛門や堀友直、川村又助らにより、今日の萬古焼の基礎を形成しました。

②東海地方固有の植物

東海地方の固有種であり、ナシの原種といわれるイヌナシ(マメナシ)の自生地があります。また、イヌナシと栽培ナシの雑種であるアイナシの自生地もあり、ともに国指定天然記念物に指定されています。ため池周辺や湧き水のあるやや湿った場所に自生していますが、耕地整理や宅地開発で生育地が減っています。

③川と桜並木

地区内には、海蔵川、三滝川等が流れています。海蔵川には、昭和34(1959)年頃の改修工事により堤防に桜が植樹され、以来地区の誇りとして実行委員会により拡充、保全が行われてきました。現在、海蔵川左岸の末広橋～新開橋までの約1.5kmに約500本のソメイヨシノが並木をつくり、本市の桜の名所となっており、多くの花見客でにぎわっています。

④獅子舞等の祭礼行事

かつて旧東阿倉川村は伊勢大神楽の発祥地の一つであり、獅子舞が昭和20年代半ばまで継続していました。令和2年(2020)には60年ぶりに伊勢大神楽が海蔵神社に奉納されました。また、御厨飽良河神社には、安政2(1855)年と記された獅子頭が残されています。現在も西阿倉川獅子舞保存会が獅子舞を保存・継承しています。

⑤東海道

地区の東部には東海道が通っており、三ツ谷の一里塚は日本橋から99番目のものです。一里塚があった場所は、昭和20年代に海蔵川が拡幅された際に川の中に取り込まれてしまいましたが、平成13(2001)年、海蔵川左岸に一里塚跡の石碑が建てられました。近くには、明治18(1885)年2月、旧桑名郡多度町(現桑名市)の多度神社を勧請して建立された多度大社が街道に面して鎮座し、地域の人々より厚い信仰を受けてきたといわれています。

(4) 羽津地区



森家住宅



志氏神社古墳



羽津城跡

①東海道

東海道を沿って、集落が形成され発展してきました。現在も常夜燈や一本松（かわらずの松）、道標や大規模な町屋の趣を伝える民家もあり、街道の歴史を感じることができます。

②古代史の舞台

672年壬申の乱のとき、大海人皇子が朝明郡に立ち寄った際に、天照大神を遥拝したとの『日本書紀』の記載から、天武天皇神宮遥拝所碑が糠塚山（額突山）の山頂にあります。また、奈良時代の聖武天皇の東国行幸にお供した丹比家主真人が詠んだとされる、「後れにしひとを思はく思泥（四泥）の崎木綿取り垂でて幸くとぞ思う」が『万葉集 巻六』に収められ、その「思泥（四泥）の崎」が志氏神社付近とみられ、歌碑が神社内にあります。

③古墳文化

志氏神社境内にある志氏神社古墳は、市内で唯一確認されている前方後円墳で、古墳時代の前期（4世紀末）に築造されたものと考えられ、市指定史跡に指定されています。古墳からは内行花文鏡、車輪石、勾玉、管玉が出土し、当時の地に勢力を誇った豪族の存在がうかがえます。これらは市指定有形文化財に指定されています。また、糠塚古墳群は山頂やその周辺に古墳が築かれ、埴輪や須恵器が出土しています。大正時代に消滅した死人谷横穴群では、金銅製の環頭大刀柄頭が2個出土し、一つは現在東京国立博物館に所蔵されています。

④仏教文化

大膳寺は、10世紀に慈恵大師（慈恵大師・良源）の弟子である覚嶺が建立したとされています。大膳寺跡として、発掘調査が行われ、大量の平安時代の瓦が出土しています。市指定史跡に指定されています。その後、16代円爾が本願寺蓮如上人の教化を受け浄土真宗に転じ、大膳寺を出て浄恩寺を起こしたと伝えられています。光明寺は、弘仁年間（810～824）に空海が諸国を巡回した際に始めたといわれますが、享祿年間（1528～1531）に、羽津城主赤堀左京大夫盛義が出家して光明寺に入り、現在地に寺を移したといわれています。また、正法寺は、応永年間（1394～1428）に羽津城主赤堀右エ門大夫盛宗が開基となり開山したといわれます。

⑤赤堀三家

応永年間（1394～1428）、田原孫太郎景信が上野国（今の群馬県）赤堀庄から移って赤堀城を築き、一帯を赤堀一族が治めたといわれています。景信の長男である盛宗が羽津城を築城し、以降6代にわたって支配が続いたとされています。永祿10（1567）年に、織田信長の北勢侵攻でその軍門に下ったとされます。羽津城跡は現在、土塁が名残をとどめ、市指定史跡に指定されており、石碑が建っています。また、文明年間（1469～1487）の文獻資料からはすでに城下町の形成が推測されます。

⑥海岸沿いの開発

遠浅の海岸沿いの砂浜には、明治末より海水浴場が整備され、大正13(1924)年には伊勢湾で唯一の有料の「霞ヶ浦海水浴場遊楽園」が開設されました。名古屋からの交通の便の良さから、周辺には別荘が競って建てられましたが、伊勢湾台風の被害で砂浜は消滅しました。現在、霞ヶ浦緑地として市民の憩いの場となっています。また、昭和4(1929)年～昭和25(1950)年までは競馬場もありましたが、競輪場になり現在に至っています。昭和40年代以降、出島方式によって埋め立てが行われ、第3コンビナートが形成されました。現在は工場夜景が本市の観光資源として発信されています。

⑦祭礼行事

羽津地区の獅子舞は「中北條獅子連中」、「中南條獅子連中」及び神楽獅子にユーモアと曲芸を取り入れた「石北宮守太神楽保存会」の3団体があり、例祭において地区及び神社にて舞を奉納しています。

また、他ではほとんど行われていない神事として、伊賀留我神社の「日待ち神事」が氏子を中心に現在も行われています。

(5) 富田地区



富田の一里塚跡



鳥出神社の鯨船行事



アミカン本社事務所

①東海道（立場）

富田は、江戸時代に桑名藩領となり、東海道の桑名宿と四日市宿の間の「立場」と呼ばれ、高札場が設けられ、一里塚が建てられ、常夜燈が置かれました。人々の往来で大変なにぎわいがあり、茶店が軒を並べ、松かさで焼いた名物の焼き蛤を売る光景が見られました。当時の様子は浮世絵や『東海道中膝栗毛』等に描かれています。また、俳人室井其角が尾張屋の店先で詠んだ「蛤の焼かれて鳴くやほととぎす」という句があり、句碑が富田浜に建てられています。

②中世の城館

「朝明郡富田之館」を拠点としたとされる伊勢平氏の一族、進士三郎基達は、元久元（1204）年、いわゆる三日平氏の乱で、京都の守護平賀朝雅に滅ぼされました。近世の伝承では、室町時代に南部氏が信濃国から移り、富田城を築き、織田信長の北勢侵攻で滅ぼされるまでこの地を治めたとされます。また、貞冬という人物が越前朝倉氏のもとにいましたが、応永年間（1394～1428）の乱を避けて当地に移り、地名にちなんで茂福氏を名乗ったともされ、朝明川上流の保々西城を構えた朝倉氏と同族と伝えられます。近世の軍記には、永禄3（1560）年に羽津城主の田原氏と朝倉氏とが激しく争う茂福合戦等が続き、永禄10（1567）年には、城主朝倉益豊が、長島で滝川一益に謀殺され、その際、主人の首を家臣が保々に葬ったとされます。この戦いで茂福城は落城したとあります。富田の一本松は、滝川軍が海路から上陸する目標にしたといわれています。

③多彩な祭礼行事

鯨船行事、石取祭、虫送り、どんと焼き、亥の子まつり等、長い歴史を刻む祭礼行事が大切に引き継がれています。これらは、五穀豊穡や豊漁を祈る行事です。鳥出神社の鯨船行事は、国指定重要無形文化財に指定され、ユネスコ無形文化遺産に登録されています。鳥出神社には市指定有形文化財に指定されている「奉納御座船模型」が2隻あり、1隻の収納箱には天明元（1781）年の墨書銘があります。その頃に鯨船行事が始まったという伝承もあります。

④漁師町と地場産業

近世より海岸部では漁師町が形成されました。現在も海岸に向かって伸びる町割、未だ多く残る弁柄格子と立てかけられた縁台等、往時の町並みを感じることができます。また、漁業を支える漁網製造が江戸末期から発達し、地区の重要な産業となっています。アミカン（旧網勘製網）本社事務所や堀は国登録有形文化財に登録されています。地区が発展したことで祭礼にかかせない提灯製造も発達し、明治5（1872）年には製造が行われており、「四日市の提灯」として三重県の伝統工芸品に指定されています。石取祭の祭車に飾られ、また鯨船行事の際には、北島組・中島組・南島組の通りごとにテーマ性を持った華やかな提灯を取り付けた提灯台

が設置されて祭りに彩りを添えています。

⑤桜並木

十四川沿いの桜並木は、市内の桜の名所となっています。堤防に沿って東西に約1.2km、ソメイヨシノが600本余り並んでいます。桜並木は、大正14（1925）年、網勘商店から網勘製網株式会社へと法人化されたのを記念して植樹されたのが始まりです。地区の人たちが花壇を整備する等、住民の憩いの場となっています。

⑥鉄道

富田は、JR関西本線、近鉄名古屋線、三岐鉄道三岐線が通る交通の要衝で、JR富田駅、近鉄富田駅は地域の核となっています。三岐鉄道は、いなべ市藤原町の工場から四日市港にセメントを運ぶ目的で昭和6（1931）年に開通し、今も現役です。

⑦記紀神話の舞台

富田の地名は、『古事記』でヤマトタケルノミコトが大きな白鳥と化して飛び去ったという伝説より、「とんだ」が訛ったといわれています。また、鳥出神社の社名も、「鳥が出る」というもので、このヤマトタケルノミコト伝説に由来するといわれています。

(6) 富洲原地区



旧東洋紡績富田工場原綿倉庫



けんか祭り



伊勢湾台風慰霊碑

①近代化の先駆け

大正3(1914)年に10世伊藤伝七創設の三重紡績と大阪紡績が合併して東洋紡績株式会社が誕生すると、大正6(1917)年に東洋紡績富田工場の操業が開始されました。塩水が混じり農業には向かない土地でしたが、海上交通が便利で工場立地に適しており、昭和初期まで原綿倉庫や事務所、社宅等が建設されました。地区の人口も増え、富洲原地区は発展しました。水道が早くに敷かれる等、本市の近代化の先駆けとなった地区であり、近代建築が残ります。富洲原小学校の講堂は、地元の実業家である平田佐次郎や伊藤平治郎、及び町民の寄付も受け、昭和11(1936)年に建設されたもので、現在も当時の姿を残したまま利用されています。また、旧東洋紡績富田工場原綿倉庫は、工場の建物として唯一残っているもので、国登録有形文化財に登録されています。

②古代史の舞台

聖武天皇が東国行幸の際に詠んだとされる、「妹に恋ひ吾の松原見渡せば潮干の潟に鶴鳴き渡る」が『万葉集』に収められ、この松原を聖武天皇社付近とする伝承があります。聖武天皇社は、安貞元(1227)年に伝承にもとづきこの地に創建された、と伝えられます。

③漁師町の歴史と関連産業

近世より富田一色は漁師町として栄えてきました。現在も町割等に当時の町並みを感じることができます。水産物加工も盛んに行われてきました。また、漁業を支える漁網製造が江戸末期から発達し、平田漁網商店(のちの平田紡績)等、地区の重要な産業となりました。

伊藤平治郎は、漁網だけでは不安定と考え、明治37(1904)年に「三重浴布商会」を設立し、手織機で伊勢タオルの製造をはじめました。

④暮らしと祭礼行事

松原、天カ須賀の石取祭、富田一色のけんか祭り、どんど、がに祭り等、長い歴史を刻む祭礼行事が大切に引き継がれています。石取祭は、松原と天カ須賀各5台の祭車が鉦・太鼓を打ち鳴らし町内を練る賑やかな祭りです。けんか祭りは、鎌倉時代、非業の死を遂げた佐原豊前守の怨霊を鎮めるため、満月上人が民衆とともに鉦を叩き練行したことに由来すると伝えられています。大鉦を鳴らし飛鳥神社に入ろうとする宮守と、太鼓を叩き防ごうとする氏子たちが激しくもみ合う勇壮な祭りです。

⑤八風道

八風道は富洲原の海運橋から鈴鹿山脈を越え、近江(滋賀)へとつながる街道です。古くは、保内商人を中心とする四本商人(東近江の商人)が往来する道として栄え、江戸時代以降は、富田一色から魚を近江に売りに行くために使ったといわれています。現在も街道沿いには道標等が残っています。当時、廻船業に従事する人も多く、江戸時代末期には、大矢知を中心とした忍藩の年貢米が富田一色の浜から江戸方面へ積み出され、海運橋近くの運河沿いには陣屋河岸や酒蔵・倉庫等が立ち並び活況を呈しました。

⑥伊勢湾台風被災

昭和 34（1959）年の伊勢湾台風は市内で死者 110 余名もの甚大な被害を出しました。特に富洲原・富田の沿岸部では多くの家屋が全壊・流失しました。市内で最も被害の多かった富田一色の海浜緑地に、殉難者の冥福を祈るため、昭和 41（1966）年に慰霊碑が建立され、毎年、被災した 9 月 26 日に殉難者慰霊献花式が催されています。

(7) 大矢知地区



久留信官衛遺跡公園



観音寺・慈恵大師坐像



大矢知素麺

①忍藩の大矢知陣屋

江戸幕府の成立により桑名藩領となりましたが、文政6（1823）年に桑名藩主松平氏が武蔵国忍への転封を命じられたのに伴い忍藩の領地となり、八風道の要地であった大矢知村に陣屋が置かれました。現在の市立大矢知興譲小学校の敷地が忍藩陣屋跡であり、濠の土手の松並木が往時を偲ばせます。明治3（1870）年に庶民を対象とした藩校興譲堂が造られ、校名の由来となりました。

②古代朝明郡の郡衙

古代には朝明郡に属し、朝明郡の郡衙が置かれました（久留信官衛遺跡）。『日本書紀』によると、天武元（672）年、壬申の乱の際に大海人皇子が朝明郡の迹太川で天照大神を遥拝し、その後朝明郡家に入ったと記載されます。また、『続日本紀』や『万葉集』によると、天平12（740）年、聖武天皇が東国行幸の際に朝明行宮に2泊したとされ、古代史の歴史の舞台となり、天武天皇迹太川御遥拝所跡（県指定史跡）等、関連する史跡が地区の中に点在しています。

③仏教文化

垂坂山観音寺は、平安時代の延長6（928）年に朝明郡司である船木良見の帰依奇進を受け、元三大師（慈恵大師・良源）によって建立されたのが始まりと伝えられます。伊勢天日別院として栄え、最盛期には24坊を擁する寺院で観音寺はその奥の院だったと伝えられています。しかし、天正3（1575）年に織田信長の兵火によって、諸堂はことごとく炎上したと伝えられています。元禄4（1691）年、桑名藩主松平定重の命により再興され、現在、慈恵大師坐像（国指定重要文化財）をはじめ多くの文化財を所有しています。

④中世の城館

南北朝時代の文中元（1372）年、垂坂山に布陣した南朝側の北畠顕泰と北朝側の仁木義長・南部頼勝（大矢知磐主）が争った垂坂山の合戦が起りました。その後、いわゆる北勢四十八家が割拠したといわれ、勢力争いをするなか、大矢知地区には、大矢知氏による大矢知城、蒔田氏による蒔田城が築かれたとされます。

⑤東海道と八風道

東海道と八風道との交差点があり、昔から交通の要衝となっていました。東海道沿いには寺社が多く存在し、朝明川橋のもとには常夜燈が建てられています。

八風道は、富洲原の海運橋から鈴鹿山脈を越え、滋賀へとつながる街道です。中世には、保内商人を中心とする四本商人（東近江の商人）が往来する道として栄え、江戸時代以降は、富田一色から魚を近江に売りに行くために使ったといわれています。また、文政6（1823）年に忍藩の陣屋が置かれると、八風道は年貢米の輸送幹線となりました。街道に残る道標の一つは、安政3（1856）年に当時の陣屋の年貢米を扱う車力衆により建てられたもので、大八車の交通量が多かったことを物語っています。現在も街道沿いには、昔ながらの店舗や町屋、道標等が残っています。

⑥江戸時代からの地場産業

地区を流れる朝明川の伏流水を利用した地場産業として、江戸時代より酒造り等の醸造業が盛んでした。また、鈴鹿山脈から吹き降ろす「鈴鹿おろし」によって麺を乾燥させるのに適した場所であることから、大矢知手延素麺は、江戸時代末期から農閑期の農家の副業として生産されてきました。明治初期には麩式の製麺づくりが取り入れられ、本格的な素麺作りが始まったといわれ、地場産業として大きく発展しました。

⑦獅子舞

立阪神社獅子舞は、弘化元（1844）年に垂坂の麴組合と伊勢玉垣の麴組合の間に商権に関わる争論が起こり、これに勝訴したのを祝って奉納したのが起源とされます。久久志弥神社（鈴鹿市）に伝わる箕田流で、10月の大祭に行なわれ、市指定無形民俗文化財に指定されています。また、長倉神社獅子舞も箕田流で、明治時代初期から始まったとされ、10月に行なわれています。

(8) 八郷地区



伊坂銅鐸



旧平田家住宅



伊坂ダム

①先史時代から古代の文化

縄文時代中期から人々の暮らしがありました。弥生時代には、菟上遺跡や西ヶ広遺跡、金塚遺跡に大規模な集落が見られます。伊坂銅鐸は、伊坂町の重地山から文久2（1862）年に発見された弥生時代中期の扁平鈕式六区装裱文銅鐸で県指定有形文化財に指定されています。また、朝明川沿いには浄ヶ坊古墳群のほか、石塚古墳、横穴式石室が現存する八幡古墳、埴輪が出土した松山古墳等の古墳が多く分布しています。金環が出土した金塚横穴墓等、墳丘を持たない横穴墓が多いのも特徴です。古代においては朝明郡に属しており、郡の中心的な遺跡が朝明川左岸に分布しています。菟上遺跡では、飛鳥時代の掘立柱建物群が見つっています。西ヶ広遺跡では奈良時代の掘立柱建物群が整然と建てられ、朝明郡衙関連遺跡と考えられています。

②中世の城館

春日部氏による萱生城、横瀬氏による広永城、伊坂氏により伊坂城が朝明川に沿った高台に築かれました。それらは、織田信長の北伊勢侵攻により滅ぼされたと伝わりますが、実際には多くは織田家の家臣団に組み込まれたと考えられます。伊坂城跡では発掘調査が行われ、櫓門の礎石が見つかりました。現在、礎石は伊坂ダムに移設され、屋外展示されています。

③農村の暮らしの文化

農業中心の地区であり、亥の子等、五穀豊穡を願う行事があります。穂積神社では、子ども相撲が行われていました。また、旧平田家住宅は江戸末期から庄屋を務め、その後三重県議会議員や八郷村村長を務めた旧家で、明治3（1870）年に建てられた大型の主屋があります。国登録有形文化財に登録されています。

④八風道

八風道は富洲原の海運橋から鈴鹿山脈を越え、滋賀へとつながる街道です。中世には、保内商人を中心とする四本商人（東近江の商人）が往来する道として栄え、江戸時代以降は、富田一色から魚を近江に売りに行くために使ったといわれています。地区内には、八風道と多度道との交差点があり、昔は朝明郡の各村から多くの人が多度神社に参詣しました。街道沿いには、明治28（1895）年建築の木格子をもつ古い造りの家屋や、道標等が残っています。

⑤産業と景観

江戸期までは稲作中心の農業が主でしたが、江戸期後半になると田畑、山林、商店、製造業等、生活に即した多様な産業が混在した社会が成立していました。酒、味噌、醤油等の醸造業、カイロ飼育と製糸業、小麦畑と製粉・製麺等が行われていました。

明治期になると、三重県と滋賀県を結ぶ鉄道が構想されましたが実現にいたらず、昭和6（1931）年に現三岐鉄道三岐線として開通しました。三岐鉄道は人員のほか、貨物として藤原岳のセメント原料を主に木材、各種農産物、生活用品等、当地域の輸送を全般的に担って現在にいたっています。

⑥二つのダム

昭和 41（1966）年完成の伊坂ダム、昭和 51（1976）年完成の山村ダムは、県の北中勢地域へ工業用水を供給するための貯水池として三重県企業庁が建設したものです。両ダムの恵まれた自然環境を活かして、サイクリングコースが整備されています。周辺の山々の緑と湖水、ダムのダイナミックな構造物が四季折々の美しい景観をつくり出しています。

(9) 下野地区



広古墳A群



経塚公園



四日市梨

①先史時代から古代の文化

縄文時代から人々の暮らしがあり、中野山遺跡では縄文時代早期から後期の煙道付炉穴や集積炉といった調理のための施設が多数見つっています。また、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居や掘立柱建物も見つかり、長い間この地に人々が住んでいたことが分かります。古墳時代には、居林古墳群、持光寺山古墳群、鶯谷古墳群、西ノ山古墳、広古墳群等の多くの古墳が造られます。とくに広古墳群は、この地域では最大級の方墳を主とするもので、地域の歴史上重要であり、県指定史跡に指定されています。古代においては朝明郡に属しており、関連する古代の遺跡が多く分布しています。北山A・B遺跡の出土品からは、製鉄を行っていたことが推測されます。また、中野山遺跡では、計画的に配置された掘立柱建物が見つっています。

②八風道

八風道は富洲原の海運橋から鈴鹿山脈を越え、近江(滋賀)へとつながる街道です。古くは、保内商人を中心とする四本商人(東近江の商人)が往来する道として栄え、江戸時代以降は、富田一色から魚を近江に売りに行くために使ったといわれています。現在、街道沿いには札場跡があり、ほかに道標等が残っています。

③経塚公園と三賢人

経塚公園(市指定史跡)にあるといわれる経塚には、かつてあったとされる西徳寺が織田信長の兵火で焼失した際、寺の僧侶が保存のために大般若経を埋めたとの伝承があります。今では、その目印であったヒノキが大きく成長しています。また公園には、地元で三賢人と呼ばれる先人たちの顕彰碑が建てられ、敬われています。三賢人とは、文久3(1863)年から明治8(1875)年まで安楽寺境内に寺子屋を開き子弟の教育にあたった藤井昇善、明治時代の政治家で下野村初代村長であり学校教育振興に熱心だった下田享三、儒学者であり忍藩の藩校興譲堂の教頭で、半学舎という私塾を開いた大賀賢助です。下野地区で教育に尽力し、数多くの人材を輩出し、地区の発展に大きく寄与しました。

④農村の暮らしの文化

昔から農業を中心とした地区であり、子ども相撲やどんど等、子どもが中心となる行事が行われています。なお、経塚公園で行われるこども角力(相撲)は、現在中止されています。

⑤四日市梨の産地

山城町では、明治時代末期から始まった特産物として有名な「四日市梨」の生産が、現在でも盛んです。冬季の鈴鹿おろしの吹く寒い晴天の日が続く気候が、梨づくりに適しているといわれています。

(10) 保々地区



大樹寺・仏涅槃園



市場町の獅子舞



神崎の常夜燈

①先史時代から古代の文化

縄文時代から人々の暮らしがあり、小牧南遺跡では縄文時代中期の掘立柱建物や堅穴住居のほか、古墳時代から飛鳥時代の堅穴住居が見つかっています。丸岡遺跡は縄文時代後期から鎌倉時代に至る複合遺跡です。また、筆ヶ崎西遺跡では古代の大規模な集落跡が見つかり、この地に人々の暮らしが続いていたことがわかります。古墳時代には筆ヶ崎古墳群、公事出古墳群、門ノ上古墳群、道具林古墳、若宮古墳群等の多くの古墳が造られます。筆ヶ崎古墳群では、耳環やかんざしが出土しています。また若宮1号墳は、朝明郡を治めていた殖栗連の墓であると、地元で伝承されています。明治15(1882)年に発掘が行われ、横穴式石室であることが判明し、石室内から金環・須恵器杯・鉄鏃等が出土しました。これら出土品は、殖栗神社(西村町)の宝物として保存されています。現地には、殖栗連の墓として碑が建てられています。

②中世の寺院

大樹寺は、宝徳年間(1449~1451)に保々城主朝倉氏が開基、臨済宗妙人心派 桃隠玄朔(のち、真源大沢禅師の勅諭を受けた)を開山として創建されたと言われています。県指定有形文化財「真源大沢禅師像」、「禅源大 济禅師像」、「大般若経120帖」、「仏涅槃園」、市指定有形文化財「広山和尚画像」等、多くの文化財が伝えられています(現在、四日市市立博物館に寄託)。また、朝倉城主とされる浄蓮寺のほか、行円寺、円覚寺、少林寺等の多くの寺院があります。

③中世の城館

室町幕府が北伊勢地域に配置した奉公衆のうち、朝明郡の奉公衆は十ヶ所人数と呼ばれ、そこに名が見られる朝倉氏により、保々西城、市場城、中野城が築かれました。その後、織田信長の北伊勢侵攻によりその軍門に下ったとみられます。現在も、保々西城跡や市場城跡には、当時の井戸跡・空堀・土塁が良好に残っています。

④農村の暮らしの文化

江戸時代、天春家は朝明・三重から員弁郡にわたる地域(桑名藩、忍藩、天領)の庄屋・大庄屋役を務め、桑名藩の代官に任用されたこともありました。その天春家が所蔵してきた文禄3(1594)年の太閤検地をはじめとする土地台帳や、貢租、宗門改等の古文書は、当時を知るうえで貴重な資料であり、市指定有形文化財に指定されています。また、市場町獅子舞は明治初期に山之一色村(現山之一色町)から習ったと伝えられ、久々志弥神社(鈴鹿市)に伝わる箕田流です。起源は、室町時代に保々西城主朝倉備前守兵部太夫と千種城主の勢力争いの

中、戦いのたびに神社仏閣に武士が乱入することから、その罰を恐れた朝倉備前守が朝明川の南にあった菩提寺大樹寺と殖栗神社を川北に移し、毎年9月9日に武運長久を祈り、大般若經600巻の転読と五穀豊穰のため獅子舞を奉納したことに始まると伝えます。現在、10月の殖栗神社の祭礼に奉納され、市指定無形民俗文化財に指定されています。

⑤八風道

八風道は富洲原の海運橋から鈴鹿山脈を越え、近江（滋賀）へとつながる街道です。中世には、保内商人を中心とする四本商人（東近江の商人）が往来する道として栄え、江戸時代以降は、富田一色から魚を近江に売りに行くために使ったといわれています。現在も街道沿いには道標等が残っています。神崎（現在の小牧町南）の常夜燈は、八風道・四日市道・千草道・員弁道の五差路（下野・保々・県の村境）に安政7（1860）年に建立されたものです。当時、美濃・関ヶ原、員弁の人たちが伊勢神宮に参拝するためにここを通過して四日市から東海道へ出て、この周辺は旅人でにぎわっていたといわれています。

(11) 三重地区



御館獅子舞



旧三重村役場倉庫



御池沼沢植物群落

①今に伝わる地名の由来

三重の地名について、『古事記』にあるヤマトタケルノミコトが東国平定の帰途、病気になるこの地を通った際、「吾は足は三重の勾（まがり）の如くして甚（いと）疲れたり」と言ったのが由来といわれていて、内部地区の杖衝坂が知られていますが、西坂部町御館にミコトが足を洗ったからとのいわれがある足洗池があります。なお、地名の足洗とは、葦に覆われたところという意味からきたともいわれています。

また、明治になって、壬申の乱で大海人皇子がこの地を通った時、兵を休めて一夜を明かしたことから、御館の名が起ったという説が唱えられています。

②先史時代から古代の文化

地区の中央を海蔵川が流れ、肥沃な土壌と豊富な水に恵まれた稲作地帯として発達しており、数多くの遺跡が発見されています。海岸線を東に見下ろす生桑丘陵の北端に、弥生時代前期の集落跡である大谷遺跡があります。そこからやや上流には、古墳時代後期から平安時代中期にかけての集落跡である落河原遺跡、飛鳥・奈良時代の集落跡である貝野遺跡があり、多くの人々がこの地に住んでいたことがわかります。また、古墳時代には御池古墳群が造られ、発掘調査で装飾須恵器・特殊須恵器（市指定有形文化財）等の特徴的な副葬品が出土したことから、有力者の存在がうかがわれます。

③暮らしと祭礼行事

御館獅子舞は今から1300年程前、天武天皇が西坂部町の江田神社に獅子頭を動納したのが始まりという伝承があります。鈴鹿市榑大神社山本流の獅子舞です。生桑長松神社の大鏡餅神事は、鳥が羽を広げたような形状のトンビと呼ばれる餅を置いた鏡餅を神社に奉納するという特徴のある正月行事です。ともに市指定無形民俗文化財に指定されています。獅子舞は、箕田流が小杉神社、刑部神社、遠保神社でも奉納され、また、みくわまつり等の祭礼行事もあり、伝統が引き継がれています。

④近代の公共建築物

大正5（1916）年に建築された旧三重村役場倉庫は、国登録有形文化財であり、現在は、三重郷土資料館として活用されています。生桑水源池は、大正8（1919）年に四日市港の外国航路開設に伴い船舶への給水を目的に設立された四日市給水株式会社を、昭和3年（1928）に四日市市が買い受け、昭和7年（1932）に完成させました。現在も水道水を配水する施設で、災害時には応急配水拠点となります。

⑤特色ある自然環境 御池沼沢植物群落

御池沼沢植物群落は、台地東端裾の湧水でできた南北約400m、東西約800mの一つの湿原及び沼沢地でした。現在は、中央部分が水田に開発され、東部と西部に分かれています。東海地方固有の植物やレッドデータブックに掲載されている絶滅危惧種をはじめとする希少な湿地の植物が自生しており、国指定天然記念物に指定されています。現在、地区の方々や環境保全ボランティアの協力により、湿地の植物群落を守る活動が継続されています。

(12) ^{あがた} 県地区



竹谷川



グリーンパーク岡山



岡山古窯跡群 3号窯発掘調査風景
昭和40(1965)年

①農村の暮らしの文化

農業中心の生活が営まれ、農耕生活の節目や寺社の行事がそのまま地区の年中行事として古くから執り行われてきました。暮らしの中で育まれ、受け継がれてきた伝説・昔話、郷土料理等が現在も大切にされています。

②学者、俳人(旧派・新派)を生んだ地

江戸期の儒学者・漢詩人、大正・昭和の俳人(旧派・新派)・歌人を数多く輩出しています。久保三水は、江戸後期の儒学・漢学者で、その子蘭所とともに私塾「修講館」を開いて子弟を教導しました。久保三水・蘭所墓碑が蓮行寺の墓地内に建立され、住民から敬われています。

③人の往来 道標 22基

江戸時代には津藩、忍藩、菰野藩、吹上藩、一宮藩等の分割領有となり、多くの人の往来がありました。現在、地区内には、22基にのぼる道標や、常夜燈が残っています。

④桜並木と堂

地区内には3つの河川(海蔵川、竹谷川、三滝川)に潤された田園地帯が広がっており、豊かな自然が色濃く残っています。竹谷川では、熱心な市民活動により、春には桜が咲き誇り、夏には螢が飛び交い、近年では昆虫・小動物・鳥類が集まるようになり、四季を通じて自然を感じることができるようになりました。

⑤古代の遺跡 須恵器、瓦生産

独立した丘陵である岡山には、現在、住民の憩いの場として親しまれている市民緑地「グリーンパーク岡山」があります。また古代の窯跡7基が残る岡山古窯跡群があり、古墳時代後期(6世紀代)から平安時代末期(12世紀代)まで窯が造られました。杯・高杯等の須恵器のほか円面碇、瓦塔、瓦等を焼成していて、周辺寺院経営と深い関連が推測されます。

⑥中世の城館 平尾城跡

北勢四十八家と呼ばれた土豪が割拠し、勢力争いをするなか、千種常陸介が平尾城を築き、この地を治めたといわれています。その後、織田信長の北伊勢侵攻によりその軍門に下ったとされます。平成5(1993)年に行われた発掘調査で、土塁や堀で区画され、掘立柱建物や井戸があった当時の城館の姿が明らかになりました。

⑦四日市梨の産地

下海老町では、明治時代末期から始まった特産物として有名な「四日市梨」の生産が、現在でも盛んです。

(13) 桜地区



智積養水



椿岸神社獅子舞



シデコブシ群落

①智積養水

江戸時代に、隣町の菰野町神森にある湧水池の蟹池から智積村まで敷設された灌漑用水です。地区の水田を灌漑するとともに、昭和30年代まで住民は毎日顔を洗い、米を研ぎ、麵をさらし、野菜を洗う等、水の恩恵を受けてきました。水田を潤し、人々を養う恵みの水に対して「養水」の文字を当て感謝の気持ちを込め「智積養水」と呼ぶようになり、大切に受け継がれ、昭和47(1972)年養水美化のため鯉を放流し、昭和60(1985)年に環境庁選定の名水百選に選ばれるほどのきれいな水をたたえています。蟹池から引水する途中、金溪川の下を通すために、三十三間筒という地下の導水路が作られました。

②特色ある自然環境 東海地方固有種の自生

シデコブシは東海地方固有の植物で、限られた地域の湿地に自生しています。桜町のシデコブシ群落は、市指定天然記念物に指定されています。

③古代史の舞台 智積廃寺

智積廃寺は、奈良時代前期に創建された四日市最古の寺院遺跡です。四天王寺式伽藍配置をもち、川原寺式軒丸瓦、重孤文軒平瓦が出土しています。672年の壬申の乱の際、大海人皇子を支援した論功行賞として、天武政権からの援助で建立されたと考えられています。

④暮らしと祭礼行事 獅子舞

椿岸神社では、獅子舞が奉納されており、永正6(1509)年の墨書銘がある獅子頭が継承されています。無形民俗文化財の獅子舞と有形民俗文化財の獅子頭、どちらも市指定文化財に指定されています。

⑤菰野道と巡見道

菰野道(現湯の山街道)は、四日市宿から菰野町菰野へ続く街道です。菰野城下と四日市宿との往來の道であり、菰野城主の参勤交代も菰野道を通して四日市に至り、東海道に合流して江戸へ向かったといわれています。巡見道は、江戸時代に將軍の代替わりごとに諸国の政情・政道の得失等を査察するために派遣される幕府の役人である巡見使の通った道です。ともに現在も道標等が残り、往來の風景を現在に伝えます。

⑥地場産業 醸造文化と幻の製陶業

桜地区は、肥沃な土地と豊かな水に恵まれ、米麦作を主体とした地区であり、古くから酒の醸造も行われていました。現在も続く醸造所は、地区の歴史的景観を形成しています。

桜焼は、江戸時代末期の弘化元(1844)年に、桜一色村の庄屋石川平八郎によって創始され、荘岡山金福寺の北側に窯が築造されました。近江国信楽郷長野の陶器職人を呼び寄せて起こしたといわれています。「星光山」と「貞齋」の2種類の銘があります。後を継ぐ者がいなかったため、桜焼はわずか19年、一代限りで終焉を迎えました。

(14) ^{かわしま}川島地区



伊勢三郎義盛の首塚



シデコブシ群落



算額（神明神社）

①伊勢三郎義盛の首塚

三重郡出身とされる伊勢三郎義盛は、源義経の家来で、源平合戦等に軍功をたてましたが、後に義経らとともに源頼朝に追われる身となり、文治2（1186）年京で捕えられ処刑されたといわれています。その首を家来が持ち帰り、義盛が一時居を構えた川島の地に埋めたといわれる三郎塚が、川島神明神社の前にあります。義盛の菩提を弔うために創建されたと伝わる西福寺にある宝篋印塔の墓は、慶安4（1651）年、亀山領主石川昌勝が塚を発掘、遺骨を移して造ったものといわれています。

②特色ある自然環境 鹿化川と東海地方固有種

地区内には鹿化川が流れ、源流に近いと、自然豊かで水質もきれいです。川沿いには、鹿化川千本桜と呼ばれる桜並木があり、ソメイヨシノが5kmにわたり植えられています。

シデコブシは東海地方固有の植物で、限られた地域の湿地に自生しています。川島町のシデコブシ群落は、県指定天然記念物に指定されています。また、昔から虫も多く生息し、キジやカワセミ等の野鳥が身近にみられます。

③恵まれた気候風土と産業

恵まれた気候風土から良質の米を産出しており、水沢・小山田両地区と並んで伊勢茶の生産地でもあります。また、南部一帯の山間部には孟宗竹が多く、たけのこの生産も盛んです。地下水が豊かで、きれいな水を利用した造り酒屋が江戸時代より多くありました。現在は1軒の造り酒屋があります。

④算額奉納

神明神社には、江戸時代の3面の算額さんかくが奉納されています。寛政2（1790）年（県内最古）、天保15（1844）年、文久3（1863）年のもので、市指定有形民俗文化財に指定されています。江戸時代中・後期ごろ、和算家がこの地にいたことを示す貴重な資料です。

⑤近代産業

明治13（1880）年に9世伊藤伝七と6世伊藤小左衛門が、明治政府から払い下げを受けたイギリス製の二千錠紡績機を備えた三重県最初の紡績所である三重紡績所を、9世伝七が川島に設立しました。しかし、技術と動力の不足から経営難に陥っていたところ、10世伝七は洪沢栄一からの助言すけいごと援助を受け、明治19（1886）年に三重紡績会社を設立し、本社を市内浜町に設け、三重紡績所を分工場としました。三重紡績会社は、その後、大坂紡績会社と合併し東洋紡績株式会社（現、東洋紡株式会社）にまで発展します。三重紡績所は、大正13（1924）年に焼失しました。

(15) ^{きんごま}神前地区



大日寺・大日如来坐像



永井遺跡公園



和泉式部 化粧の水

①中世寺院

大日寺、観音寺、欣浄寺等の中世からの起源をもつ寺院があります。大日寺にある平安時代後期の本尊大日如来坐像は丈六仏で像高314cmを計る、市内最大の木彫仏で、市指定有形文化財に指定されています。

②先史時代の遺跡

生桑丘陵東端に、弥生時代前期の集落として有名な永井遺跡があります。遺跡で環状の溝が見つかった場所は、現在、永井遺跡公園となっています。出土品は、寺方町の文化財収蔵庫に保管されています。

③自然豊かな里山

地区の北には大日山から曾井山を中心とした緑豊かな丘陵地帯があり、自然豊かな里山を形成しています。

④農村の暮らしと祭礼行事 五穀豊穡の祭り

水利に恵まれ、米や麦を中心とする農村地区であり、寺方町及び高角町では、獅子舞や亥の子等が行われ五穀豊穡を祈ります。獅子舞は戦争により中断されましたが、獅子舞保存会が結成され継承されています。10月の例祭の日には、それぞれ氏神様へ奉納しています。

⑤大切にされる伝承

地区内には、言い伝えが残る、和泉式部化粧の水や弁慶石、夜泣き石等があり、大切に引き継がれています。翡翠谷は、平安の頃、大日山に城を構えていた平氏の武将若菜十郎永貞が、観音寺に火をかけ奪ったものの、その靈力にたたられ寺に返したという翡翠の玉かんざしが後に埋蔵されたという伝承もあります。

(16) 常盤地区



装飾須恵器 台付三連壺



赤堀城跡石碑



誓元寺光雲殿

①先史時代から古代の文化

北中寺遺跡からは6世紀前半頃の装飾須恵器台付三連壺が出土し、市指定有形文化財に指定されています。連結された壺の形式の須恵器は東海地方西部に特有であり、本市の古墳時代を特色づける出土品として大変貴重です。宮の西遺跡からは、「柴田郷長右口×」と書かれた木簡や石帯が発見され、古代柴田郷の中心的集落であったとも考えられます。また、中世の遺跡である小判田遺跡からは、掘立柱建物や井戸等の遺構や土器、木製品等が多量に出土しました。

②中世の城館 三日平氏の乱

松本城は鎌倉時代の初期、平家本流の滅亡後、伊勢・伊賀の平氏の残党が蜂起した三日平氏の乱の際、松本三郎盛光が居城したとされる城で、反乱は一時、伊勢・伊賀両国を圧倒しました。しかし、元久元(1204)年4月幕府側の追討によりこれら残党はあえなく敗走、松本城も落城したと伝えられます。

③赤堀三家

応永年間(1394~1428)、田原孫太郎景信が上野国赤堀庄から移って赤堀城を築き、一帯を赤堀一族が治めたといわれています。景信の二男である秀宗が赤堀城を継ぎ、羽津城主の長男盛宗、浜田城主の三男忠秀をあわせて赤堀三家と呼ばれ、勢力をのびたと伝えられます。赤堀城は、市域では数カ所しかない低地にある平城でした。道路工事に伴う発掘調査が数回行われ、城の一部が見つかり、土豪の文化的側面をうかがわせる木簡等、注目される多くの遺物が出土しました。

④最も歴史の長い製菓会社

翠松堂製菓は、元亀元(1570)年に製菓業を始めた。現存する製菓会社の中では国内で最も歴史の古い会社です。江戸時代には関白二条家の直参調業所として免許を受け、宮中をはじめ全国に家庭菓を販売してきました。伊勢参りの土産物や道中菓として用いられたといわれます。翠松堂の「百毒下し」は、幕末から明治時代にかけての医師松本良順が処方伝授したものです。明治20(1887)年に加藤翠松堂に商号を定め、現在も長年培われた伝統を活かしています。

⑤東海道

東海道が地区の東部を通り、芝田村、赤堀村は四日市宿の助郷として指定され、街道のにぎわいの影響を大きく受けました。現在も街道の往来をうかがうことのできる道標や町家建築が残っています。

⑥戦争遺跡

誓元寺光雲殿(納骨堂)は、昭和11(1936)年、旧常磐尋常高等小学校に建てられた奉安殿(昭和天皇の御真影と教育勅語を安置)を、終戦直後の昭和21(1946)年、ここに移築して納骨堂としたものです。終戦後に破壊されなかった数少ない耐火性のある鉄筋コンクリート造の奉安殿として、山門及び鐘楼とともに国登録有形文化財に登録されています。なお、松本町には、この奉安殿の前身建物であった奉安殿も移築されて残されています。

(17) 四郷地区



5 世伊藤小左衛門



10 世伊藤伝七



旧四日市市役所四郷出張所（四郷村役場）



西日野・東日野の大念仏

①近代産業発祥の地

江戸時代まで農村地帯で、醸造業も盛んな地域でした。明治期に入ると、伊藤小左衛門（5世・6世）、伊藤伝七（9世・10世）の功績により、製糸・製茶・醸造及びそれらの関連産業が盛んになり、三重県を代表する経済・文化の栄える村となりました。四日市港の発展とあわせて、本市の近代産業をけん引しました。現在、当時から建造物が残り、町並みを形成しています。5世伊藤小左衛門は法蔵寺本堂を寄進、また、自宅で始めた私塾の笹川学校は、現在の市立四郷小学校の前身です。10世伊藤伝七（貴族院議員、東洋紡績2代目社長）は、郷土への恩返しにと6万円（現在の価値で約3億円）という大金を寄付し、大正10（1921）年に四郷村役場が建てられました。現在、地域の歴史を伝える四郷郷土資料館として活用されています。

②中世からの寺社と信仰文化 伊勢安国寺

安国寺は、元弘の変以降の戦死者と後醍醐天皇の冥福を祈願するために、全国に一寺一塔を設けたものです。『勢陽雜記』によると伊勢安国寺は、虎関師範が暦応2（1339）年に建立、安国寺の勅号を得たものとされ、前身寺院の西明寺をあてたとされています。安国寺の総持庵と伝えられる願正寺には、西明寺以来安置されていた仏像が一部残ります。近くにある日野神社には、西明寺の本尊であったとみられる等身大の阿彌陀如来坐像が伝えられています。

③農村の暮らしの文化 三大祭

近世までの四郷村は農村でした。虫送りや獅子舞等の祭礼行事が継承され、また、歴史的な農家建築も現在まで残っています。県指定無形民俗文化財に指定されている大念仏は、鎌倉時代末期から受け継がれてきた仏教的な行事で、8月13日には東日野の西覚寺から西日野の願正寺へ、15日には西日野の日野神社から西覚寺へ互いに練り込みます。虫送りは、害虫駆除や五穀豊穡への人々の願いが込められた祭礼行事です。東日野町獅子舞は、春・秋の例祭に五穀豊穡や病魔退散を祈念して神明神社や室生神社、日野神社に奉納されています。

④風致地区と豊かな自然

本市では地区北側の緑豊かな小高い山を風致地区として指定しています。「春の丘」、「夏の広場」、「秋の小径」という散策路が整備され、豊かな四季を感じ取ることができます。風致地区の環境は地区のボランティアグループにより大切に守られています。また、地区内では、希少なカスミサンショウウオが見つかっていて、低地から丘陵地の樹林や竹林等に生息し、水田周辺の水たまりや溝、池沼、湿地等、主に止水で産卵します。

⑤三重軌道からあすなろう鉄道へ

伊藤製糸や製茶の工場があった四郷村室山を通り四郷村八王子と市内を結ぶことを目的に、今の四日市あすなろう鉄道八王子線の前進である三重軌道が大正元（1912）年に開業し、大正6（1917）年には軽便鉄道法により三重軌道と改称しました。その支線（鈴鹿支線）として、大正11（1922）年1月に日永-小古曾間が開業し、同年6月に小古曾駅から内部駅まで延伸され、現在の四日市あすなろう鉄道内部線も開通しました。あすなろう鉄道は当時の軽便鉄道の線路幅762mm（ナローゲージ）のまま運行されており、現役で残っているナローゲージは国内で3路線（通年運行は2路線）です。

(18) 小^{みやま}山田地区



矢田監物の墓



和無田のマンボ



大樟（神明社）

①矢田監物と寺社

戦国時代、12代将軍足利義晴に仕えていたと伝わる矢田監物は、丹波国からこの地に移り住み、山田城を築城し、以降代々監物を名乗ったと伝えられています。その後、後代の監物は、天正18（1590）年の小田原の陣の北条氏との戦いで戦死したといわれています。監物の墓と伝えられる墓碑は、監物の死後に家臣の平尾家子孫により、安性寺裏山墓地に建立されました。また、監物は主君義晴の菩提を弔うため長谷山万松寺を建立したとされ、現在、安性寺に安置されているこのゆかりの十一面観音菩薩立像や、安性寺に伝わる監物の所用と伝承の「槍銘 備州長船法光 長享二年※八月日」は共に市指定有形文化財に指定されています。 ※制作年代1488年

②先史時代から古代の文化

宮蔵遺跡でナイフ形石器が採取され、この地では旧石器時代から人々がいたことがうかがわれます。縄文時代には、人々が定住するようになり、縄文時代早期の一色山遺跡からは、伊勢8カ所や縄文土器等が発見されています。

古墳時代になると、穴塚古墳群、大塚野古墳群、和田ヶ平古墳群、赤池古墳群等、数多くの古墳が造られます。穴塚1号墳は直径30mの円墳で、市城南部に最大級の規模を誇ります。和田ヶ平古墳群は、足見川と鎌谷川に挟まれた台地上に7世紀の円墳が3基確認されています。発掘調査により横穴式石室が検出され、須恵器、金環、鉄鏃等が出土しました。

③農村の暮らしと農業を支える技術

古くから農村地帯として発達しており、粟・稗・小豆・大根等を栽培してきました。また、内部川、鎌谷川、足見川及び天白川が流れる起伏に富んだ丘陵地を活かしたお茶の栽培も盛んで、伊勢茶の生産地でもあります。獅子舞やどんど等の、家内安全や五穀豊穡を祈る祭礼が現在に引き継がれています。水にまつわる文化財も多く残されています。六名は内部川の川床より低いため、しばしば水害にあっていたようです。江戸時代中期の宝暦年間（1751～1764）に、内部川脇の田地の所有について水沢村と堂ヶ山村で争ったことが記録されている「水沢・堂ヶ山野境紛争の判決文書」は、市指定有形文化財に指定されています。マンボ等、灌漑用水の技術も発達しました。

④特色ある自然環境

自然が豊かで、和無田池のヒメコウホネ等の花々、ウグイスやキジ等の野鳥、ホタル等が身近に見られます。田園や茶畑の風景が広がるとともに、起伏に富んだ丘陵地が地区特有の景観を創り出しています。堂ヶ山町の神明社境内の大樟は、創建当時から樹齢850余年と推定され、市指定天然記念物に指定されています。また、おやまだ桜は推定年齢80年を超えたソ

メイヨシノの古木で、毎年4月上旬に「おやまだ桜まつり」を開催しています。

⑤本草学

鎌井松石かまいしょうせきは、京都で医学と本草学を学んだ後、幕末から明治時代中頃にかけて、西山町で医業を営みながら私塾を開き、教育に努めました。本草学の研究のため山地幽谷を巡って動植物・鉱物を採集、模写し、『三重本草稿』や『三重本草博物地誌』等、多くの本を著しました。丹波修治等と本草学者の集い「交友社」を発足させ、北伊勢地域の本草学者との交流を持ちました。

(19) 水沢地区



茶畑の風景



お諏訪おどり



もみじ谷

①お茶の栽培と人々の暮らし

好適な自然条件を利用した伊勢茶の生産地であり、地域の主要産業となっています。その起源は、平安時代に淨林寺（現在の一乗寺）の僧が、空海に製茶の教えを受け、唐伝来の茶の木を植えて栽培したのが始まりといわれ、その発祥の地「冠山茶の木原」は市指定史跡に指定されています。特産の「かぶせ茶」は、茶の木に黒い覆いを懸け生産され、水沢は一大生産地です。

一方、内部川の川底が低いこともあって、水利が悪く、飲み水にも事欠く状況でした。江戸時代前期、当時の庄屋辻久善が水不足の解消のため、内部川上流「瀬戸堰堤」から取水する瀬戸用水を築造し、多くのため池を築いて田畑を潤しました。足見田神社では、辻久善の偉業をたたえる「お諏訪おどり」が奉納され、市指定無形民俗文化財に指定されています。

②景勝地 もみじ谷

深い緑と変化に富んだ巨岩、そして鈴鹿の峰からの清流が美しい宮妻峽があります。また、もみじ谷は、江戸時代に菟野藩領であったときに整備され、昔から文人墨客が数多く訪れ、四日市の紅葉の名所となっています。

③希少動植物の棲む自然環境

鈴鹿山脈の鎌ヶ岳、雲母峰のふもと、内部川上流の扇状地に広がる水沢地区は、豊かな自然を有し、カモシカやシデコブシ等の希少動植物が見られます。シデコブシは、地元の方々による保全活動が続けられています。

④中世の城跡

加治信濃守が応永5（1398）年に水沢城を今の常願寺境内に築城し、この地を治めたとされます。永禄年間の6代加治藤九郎の時、信長に降伏し臣下になったといわれています。現在、常願寺境内の南と西に土塁が残り、堀は本堂の背後西側に灌漑用水路として残っています。

⑤巡見道・巡礼道

江戸時代に巡見道は、將軍の代替わりごとに諸国の政情・政道の得失等を査察するために派遣される幕府の役人である巡見使の通った道です。現在も道標等が残り、往來の風景を現在に伝えます。巡礼道は、巡見道にほぼ沿っており、観音信仰が盛んな江戸時代前期ごろに亀山市安坂山町坂本の伊勢巡礼第二十二番の鷄足山野登寺から、菟野町杉谷にある第二十五番引接寺、第二十六番観音寺に行く巡礼たちが通る道と呼ぶようになったと伝えられています。

また、江戸時代菟野藩の領地であった水沢町は、もみじ谷を訪れる歴代藩主も通ったとされます。

(20) 日永地区



日永うちわ



日永の追分



日永つつく踊り

①東海道 間の宿と日永の追分

日永は、四日市宿と石葉師宿の間に立つことから間の宿とよばれ、周辺には多くの旅館や茶店等が並んでいました。大名行列や参宮客でにぎわい、東海道の街道沿いには日永のなが餅、うちわ、日永足袋、しらたま等の多くの店が建ち並んでいました。日永うちわ・なが餅・日永足袋は、お伊勢参りの土産物として好評を博し、日永の三大名物と呼ばれました。現在に伝わる日永うちわの製作技術は、市指定無形文化財に指定されています。

また、日永の追分は、東海道と伊勢街道の分岐点で、多くの人々が往来し、にぎわいました。追分の鳥居は、安永3（1774）年、江戸に店を持つ一志郡川合村（今の津市一志町）の渡辺六兵衛が江戸で同志を募って寄付したものが初めてで、その後伊勢神宮が遷宮される20年毎におおよそ建て替えられています。現在の鳥居は、伊雑宮（伊勢神宮の別宮）の鳥居を用いて、平成28（2016）年に建て替えられたものです。

追分に現在ある道標は、嘉永2（1849）年に建てられたものですが、それ以前は明暦2（1656）年に市内河原町の仏性院の開基専心により建てられた道標がありました。現在は日永神社の境内に移設され、市指定有形文化財に指定されており、現在東海道に残る道標のうち最古のものです。東海道沿いには多くの寺社があるのが特徴です。

②復活「日永梅林」

登城山一帯と地藏谷、朝日公園一帯にあった日永梅林は、江戸時代後期からの歴史があり、最盛期には9千本もの梅花が咲き誇る東海地方有数の景勝地だったといわれており、ここで採れた梅の実で作った梅干が東海道でも販売されていました。第二次世界大戦で消滅しましたが、再現を願い、平成11（1999）年に地元有志により「日永梅林・登城山を復活させる会」が発足し、南部丘陵公園には約2,500本に及ぶ梅が植樹されています。

③古墳文化

茶臼山古墳群は、1号墳が造り出し付き円墳で、人物・家形・円筒埴輪や、装飾須恵器台付四連杯等が発掘調査で出土し、地域の有力者の墓とみられます。これら出土品は市指定有形文化財に指定されています。また、3号墳からは馬形埴輪が出土しています。

④信仰と祭礼行事

那護志大祓（輪くぐり神事）、つつく踊り、獅子舞等、暮らしの中の信仰にもとづく祭礼行事が現在まで伝えられています。日永つつく踊りの起源は、滝川一益との関連がいわれています。一益の母の隠居所を日永実蓮寺に建築するために地固め工事に歌った歌謡と動作を踊りとしたもの、または、一益が天白川の堤防を築く際に土を固める動作で踊られたのが始まりといわれており、市指定無形民俗文化財に指定されています。

⑤戦争遺跡と急速な都市化

1940年代に塩浜地区の港湾部に建設された第二海軍燃料廠は、空襲を恐れ、昭和19（1944）

年10月から日永の丘陵に燃料工場や貯蔵庫等を建設し、一部を疎開しました。現在でもこれら疎開施設ではコンクリートで閉ざされたトンネルが残っていて、戦争の名残を今に伝えています。また前田町、山崎町、小古曾町にあった海軍燃料廠官舎は、戦後払い下げられたことで住宅開発が進み、主要交通網や鉄道が区内を通っているという交通便利性もあって、急速な都市化が進みました。

⑥工場地帯（コンビナート）

昭和初期より沿岸部では工場の建設が進められ、昭和16（1941）年には塩浜地区で第二海軍燃料廠が操業を開始しました。太平洋戦争時の空襲により壊滅状態になりましたが、その跡地を中心に製油所等の工場誘致が進められました。昭和32（1957）年から35年にかけて日本合成ゴム、味の素、松下電工が相次いで建設され、塩浜地区とともに我が国屈指の石油化学コンビナートが形成され、本市は産業都市として発展しました。

⑦鉄道

大正元（1912）年、四郷村と市内を結ぶことを目的に、現在の四日市あすなろう鉄道である三重軌道が、日永を経由する四日市－八王子間で開通し、さらに大正11（1922）年には、その支線として日永－内部間が開通し、東海道に沿って地区を南北に縦貫しました。三重軌道のときから現代に至るまで軽便鉄道の規格が維持され、今では、平常運行される日本一狭い線路幅（ナローゲージ）の鉄道として知られています。

(21) ^{しおほま}塩浜地区



磯津の鯨船行事



海山道稲荷神社
狐の嫁入り神事・節分



馳出常夜燈（浜街道）

①祭礼行事

磯津町の氏神である塩崎神社の祭礼として、磯津の鯨船行事があります。鯨船が磯津町に導入されたのは大正年間のこととされ、「大正丸」の船名を持ちます。市指定無形民俗文化財に指定されています。

^{すまきほまみやしののし}洲崎濱宮神明社の境内社、^{みやまど}海山道稲荷神社では節分祭りが行われ、「福豆まき」や「狐の嫁入り道中」は、多くの参拝客でにぎわいます。御園神社では川合町と御園町の獅子舞が受け継がれていますが、^{ほまど}馳出町獅子舞は現在休止中です。

②漁業と暮らし

平安時代のころから、伊勢神宮の「御園」として、塩作りをしており、塩作りは江戸時代初期まで行われていました。また、海辺に開けた塩浜村では江戸時代に磯津で漁業が始められ、農漁業を営む村落を形成していました。毎年3月1日に行われる磯津のみくわは、魚の供養を行う漁師の祭りです。

③参宮下街道（浜街道）

江戸時代には街道が整備され、伊勢参宮街道（日永～伊勢）の下街道として塩浜地区内では、大井の川・海山道・馳出・御園町・塩浜本町1～3丁目・川合町を抜けて、鈴鹿川を渡り小倉・楠に抜ける道筋に沿って集落が栄えました。現在、常夜燈や道標が残り、当時の人々の往来の姿を伝えています。

④工業地帯（コンビナート）

沿岸部には、昭和13（1938）年に石原産業が四日市工場建設に着手し、さらに昭和16（1941）年には第二海軍燃料廠が操業を開始しました。太平洋戦争時の空襲により壊滅状態となりましたが、その後、跡地利用の工場誘致が進められ、昭和33（1958）年に第1コンビナートが本格的に稼働しました。

コンビナート企業の操業の拡大に合わせて、昭和40年代には大気汚染によるぜん息患者が増える等の深刻な公害問題が発生し、公害訴訟が昭和42（1967）年に提訴され、昭和47（1972）年7月24日に原告側の全面勝訴の判決が出されました。この判決を契機に企業側の公害防止対策の改善が進められました。

⑤鉄道

国内輸送の主力が鉄道であった近代に、工業地帯では東洋紡績（現コスモ電子）や石原産業、三菱化学（現三菱ケミカル）等に貨物輸送の鉄道専用線が整備されました。現在では、昭和四日市石油のみ存続し他は廃止となっていますが、石原産業引込線の痕跡が往時をしのばせます。

(22) 内部地区



杖衝坂



采女城跡



あすなろう鉄道内部線

①東海道

内部地区は、江戸時代には亀山藩領、桑名藩領、天領等に分かれて統治されていました。近世東海道が通り、街道沿いに町並みが形成されました。松尾芭蕉が貞享4（1687）年に江戸から伊賀に帰る途中、街道中屈指の急坂である杖衝坂で落馬した際に「歩行ならば杖衝坂を落馬かな」との句を詠んだといわれています。宝暦6（1756）年に建てられた句碑が杖衝坂の中ほどにあります。坂の上には茶店が軒を連ねて饅頭を売っていました。『東海道名所記』（浅井了意 万治元（1658）年）には、「杖つき坂 ここに饅頭あり 風味すこぶるよし 杖つき饅頭これなり」と紹介されています。また、坂の上から少し進んだ辺りに101番目の一里塚がありました。この辺りには近代まで松並木が残り、その見事な美しさは大正時代の紀行文に記されています。

②記紀神話の舞台

ヤマトタケルノミコトが東国を平定し、大和への帰途、病にとりつかれて伊勢国に入りました。采女村あたりまで来たとき、「吾が足は三重の勾（まがり）の如くして甚（いと）疲れたり」と述べて、杖をついて急坂をようやく登りました。それが「三重」の地名の由来となり、その坂を「杖衝坂」といったといわれています。江戸時代には、整備された東海道上に伝承地が求められました。坂の上には、血塚社があり、衰弱した身体で坂の上に辿り着いたが足下を見ると出血していたので、この場所で血を洗い落として止血したと伝えられています。采女の地名は、古代采女郷に由来し、『古事記』にある「三重の采女」の故事に関連して、大和王権との関係を取り結ぶ有力な豪族の存在がうかがわれます。現采女町の町名の由来となっています。

③古墳文化

内部川沿いには、北小松古墳群、山川古墳群、菅野古墳群、西野古墳群、大垣外古墳群、西起古墳群、五百山古墳群、八幡塚古墳等の多くの古墳が集中しています。

④中世の城館 采女城跡

文応元（1260）年、後藤基秀が三重郡采女郷の地頭となって一族郎党とともに移り住み、采女山に采女城を築城したといわれています。300年以上にわたり後藤家15代の居城でした。廃絶については諸説あり、永禄11（1568）年、織田信長の北伊勢侵攻により戦って滅ぼされた、もしくは元亀3（1572）年、信長により城を追われた、またはその麾下に属したといわれています。采女町の成満寺は後藤家の菩提寺であったと伝わっています。采女城は独立した9つの郭、高い土塁と深い空堀、虎口における屈折した形態、櫓台と推定される箇所等、保存状況が極めてよく、北勢地方における戦国期の典型的な城館の在り方を示した山城を知る上で一級の資料です。現在、地元の保存会によって一部が市民緑地として整備され、維持が図られています。

⑤中世の寺院

中世に建立されたと言われる大蓮寺、願誓寺、成満寺、中山寺、上品寺等の多くの寺院が

あります。上品寺の釈迦堂（元文元（1736）年建立）にある釈迦如来坐像は平安時代前期の彫像で、市内木彫最古の作例として、市指定有形文化財に指定されています。

⑥暮らしと祭礼行事

小許曾神社は、延喜式内社として神名帳に登載されています。その年の作物の豊凶を占う粥試し神事等、多くの伝統行事が伝えられています。

⑦鉄道

近代産業発祥の地である四郷と市内を結ぶことを目的に開業された三重軌道（現四日市あすなろ鉄道）の支線として、大正 11（1922）年に日永-内部間が開通しました。当初は鈴鹿まで延伸される計画で内部駅の少し先まで線路が敷設され、工事途中の痕跡が今も残っています。当時のままのナローゲージ（線路幅 762mm の狭軌）で運行され、現在では、沿線は住宅地開発が進み、通勤通学等、市民の足として利用され、親しまれる存在となっています。

⑧内部川と丘陵の豊かな自然

内部地区は、水沢扇状地の東端で、内部川に鎌谷川と足見川が合流する辺り一帯に位置し、内部川沿いに開けた谷底平野と周辺の台地からなっています。台地の里山には、東海丘陵湧水湿地群の特有の動植物で、三重県指定希少野生動植物であるヒメタイコウチやシデコブシが分布しています。この他にも「うつべの貴重な自然遺産」として地域登録をし、大切にしている希少生物が生育・生息する多様性に富んだ自然が残されています。一帯は水源保護地域に指定されて市民の上水道に供給されるほど、水がきれいです。

⑨戦争遺跡

小古曾町には海軍燃料廠官舎が建てられ、戦後払い下げられて宅地となっています。内部川の豊富な伏流水は、戦時中、海軍燃料廠の工業用水として利用され、井戸・送水の配管敷・配水池等の施設跡が残っています。

(23) 河原田地区



天王祭



忘帰處



みかん山

①伊勢街道

日永の迫分で東海道から分かれた伊勢街道が地区を南北に通り、街道沿いに集落が形成され、伊勢神宮を詣でる多くの人の往来がありました。かつては一里塚も置かれ、また内部川に架かる河原田橋の常夜燈は、日永の迫分から分かれた伊勢街道の一つ目の道しるべであり、往時の姿を伝えます。

②信仰と祭礼行事

京都八坂神社の祇園祭より伝わった天王祭が江戸時代後期に始まり、現在まで伝えられています。牛頭天王に疫病の災いを払ってもらおうと祈願する祭りで、紅提灯、ぼんぼりで飾った山車（元は石取祭車）を子供たちが引き、鉦、太鼓を打ち鳴らして町内を練り回ります。また、獅子舞も伝えられています。

蟹築山東元院（現在は蟹築山密蔵院）は、伝承によると、蟹が土や仏像を運んで築いたとあり、現在、仏像を運んできたこととされる蟹のはさみが保存されています。また、弘法大師空海が弘仁年中（810～823）に広大な寺域に七堂伽藍を構えたものと伝えられています。天正年中（1573～1592）に兵火にかかり焼亡しましたが、慶長3（1598）年に信徒の協力により再興したとされます。境内には、薬師如来を祀る本堂のほか、不動堂、弁天堂、地藏堂、稲荷大明神があります。

③古来よりの自然災害

古来より内部川、鈴鹿川の水害に苦しめられてきた地区で、特に万治2（1659）年の大洪水により、川尻、川原田、貝塚、内堀の各村が大きな被害を受け、集落を現在地に移動したと伝えられています。明治、大正、昭和の時代に入っても何度か被害を受けていますが、それを超えてきた歴史があります。

④忘帰處

河原田神社のある三神山頂上は「忘帰處」と名付けられています。ここから見る眺めは河原田随一の景勝地で、田中光顕が熊沢市兵衛宅を訪れた際に、この地の風景の美しさに見とれて帰ることを忘れたといいます。山上からの眺めは一望千里に渡り、晴れた日には、知多半島から木曾御岳の山並みも望み見ることができます。

⑤みかん山

西部丘陵地帯は、かつては麓まで海が迫っており、弥生時代後期の八幡、狐穴、中広、三神山等の遺跡では、発掘調査で竪穴住居跡が発見されているところもあります。明治40年代、丘陵地の斜面に熊沢市兵衛を中心とする静岡のみかん栽培が導入され、河原田みかんが盛んになりました。

(24) 楠地区



旧庄屋岡田邸



吉崎海岸



南楠鯨船行事

①楠(くすのき)氏による統治

南北朝時代の正平 24 (1369) 年、信州より諏訪楠十郎貞信が来て、本郷の地に楠城を築いたと伝えられます。正平 15 (1361) 年には、臨済宗妙心寺派の正覚寺が、楠城主の菩提寺として開山されました。4代楠正威から楠氏による統治が続きましたが、天正 12 (1584) 年豊臣秀吉が勢力を伸ばして楠城が攻められ、8代正盛は岐阜に逃げましたが、加賀野井の戦いで捕らえられ処刑されたといわれています。

②地場産業

楠地区は、鈴鹿川と伊勢湾に囲まれ、水に恵まれた地形を生かした地場産業が発達してきました。酒造りは 18 世紀から始まり、明治期には生産高も県下随一、地区内には 30 以上の蔵があり、全国に知られるようになります。宮崎本店は弘化 3 (1846) 年に創業し、事務所や貯蔵庫等の建物は国登録有形文化財に登録されています。また、ハマグリの特徴が盛んで、出荷高日本一を誇っていましたが、近年出荷量が激減しています。

③旧庄屋岡田邸

江戸時代の庄屋であった岡田家の邸宅は、北勢地方に現存する数少ない庄屋敷で、木造瓦葺平屋建の主屋と立会所、土蔵も備えており、村を治めてきた旧家の建造物です。市指定有形文化財であり、現在は四日市市楠歴史民俗資料館として活用されています。

④暮らしの信仰、祭礼行事

南楠地区の鯨船行事、北楠地区の神輿渡御行事、本郷地区の湯の花神事等が行われています。南楠の鯨船行事は明治時代に始まったといわれ、北勢地方に分布する陸上での模擬捕鯨行事のひとつです。戦争のため一時期途絶えましたが、戦後すぐに復活しました。南御見東神社の祭礼行事で、鯨船は「龍神丸」と呼ばれており、市指定無形民俗文化財に指定されています。

また、湯の花神事は、天明 4 (1784) 年から伝わるとされる伝統行事で、釜番 (3 人) が直径 1 m の大釜に湯を沸し、神職が御幣で湯をかき回し、御幣を上げるとたざり立つ湯の花が飛び散り、その模様によって五穀豊穡を占う行事です。

⑤砂浜の自然—吉崎海岸—

楠地区は自然豊かで、鈴鹿川派川河口や吉崎海岸付近は、海浜植物や野鳥の宝庫です。伊勢湾に面する吉崎海岸は、本市唯一の砂浜のある海岸で、アカウミガメの産卵が見られ、三重県の県鳥で絶滅が危惧されているシロチドリが営巣地としても貴重な場所です。また、地区内の水路にはカニ等の水生生物も生息しており、本郷地区では、鈴鹿川堤防沿いの水路でホタルが舞う姿も見られます。環境を守るために、吉崎海岸の除草・清掃活動やホテル保護のためのカワナナの放流、サクラの植栽等が取り組まれています。

2. 地区ごとの歴史文化の特徴の整理

前章で、地区ごとに掲載した歴史文化の特徴及び主な「歴史文化遺産」を下表に整理します。各地区の特徴を俯瞰すると、共通性を見ることができます。次項で共通する歴史文化を束ねて四日市市の歴史文化として整理を行います。下表では、共通性が見られる特徴について、同じ背景色で示します。

※表の背景の色は次項にまとめる四日市市の歴史文化の特徴に対応しています

	歴史文化の特徴	主な「歴史文化遺産」
1 中部	① 東海道四日市宿	東海道、歴史的建造物（商家）、四日市代官所跡、なか軒、本陣跡、清水家文庫、惣業橋、東海道四日市宿資料館、通標
	② 近代産業と四日市港	四日市旧港湾施設、福業三右衛門、伊藤伝七別邸、コンビナート
	③ 室町時代からの市	室町時代からの市、慈善橋
	④ 赤堀三家	浜田城跡、十六間四方白星兜跡、建福寺
	⑤ 祭礼・行事の民俗文化	四日市祭、船船行事、山車文化
	⑥ 菟野道の起点	西町延命地蔵、町並み
	⑦ 四日市港へつながる鉄道の発達	港湾施設、鉄道・土木構造物、倉庫群・運河、末広橋梁
2 橋北	① 四日市萬古焼の産地	四日市萬古焼、山中忠左衛門、萬古神社、四日市萬古まつり
	② 東海道及び街道沿いの集落形成	東海道道標、常夜燈、文蔵の煎屋、嶋小のだんご、助郷
	③ 工場地帯（コンビナート）	第2コンビナート、コンビナート夜景
	④ 鉄道	JR 関西本線、近鉄名古屋線、三滝川橋脚
3 海蔵	① 四日市萬古焼のはじまり	四日市萬古焼、山中忠左衛門、海蔵庵窯
	② 東海地方固有の植物	イヌナシ・アイナシ自生地
	③ 川と桜並木	海蔵川の桜並木
	④ 獅子舞等の祭礼行事	伊勢大神楽、御原徳良河神社の獅子舞、獅子頭
4 羽津	⑤ 東海道	三ツ谷の一里塚、道標、多度神社
	① 東海道	東海道、一本松（かわらづの松）、道標、森家住宅
	② 古代史の舞台	大海人皇子・聖武天皇ゆかりの地（天武天皇神宮遷拝所跡、志氏神社）
	③ 古墳文化	志氏神社古墳、死人谷横穴墓群
	④ 仏教文化	大願寺跡、弘法大師ゆかりの地、浄慧寺、光明寺
	⑤ 赤堀三家	羽津城跡
	⑥ 海岸沿いの開発	銭ヶ浦海水浴場遊楽園、第3コンビナート、コンビナート夜景
⑦ 祭礼行事	獅子舞、日待ち神事	
5 富田	① 東海道（立場）	立場、富田の一里塚跡、常夜燈、道標、町並み
	② 中世の城館	富田之館、富田城跡、茂福城跡
	③ 多彩な祭礼行事	船船行事、石取祭、どんどこ、虫送り、亥の子まつり
	④ 漁師町と地場産業	漁業、漁網製造、アミカン本社事務所、提灯、東富田町の町並み
	⑤ 桜並木	十四川の桜並木
	⑥ 鉄道	JR 関西本線、近鉄名古屋線、三岐鉄道三岐線、富田駅
	⑦ 記紀神話の舞台	ヤマトタケルノミコト伝説、鳥出神社
6 富洲原	① 近代化の先駆け	東洋紡績富田工場原動力倉庫、上下水道施設、富洲原小学校校堂
	② 古代史の舞台	聖武天皇社
	③ 漁師町の歴史と関連産業	富田一色の町並み、漁網製造、水産物加工、平田紡績、伊勢タオル、地引網、いらこ
	④ 暮らしと祭礼行事	石取祭、けんか祭り、どんどこ、がに祭り
	⑤ 八風道	八風道、海運橋、廻船業
	⑥ 伊勢湾台風被災	伊勢湾台風、慰霊碑、殉難者慰霊献花式
7 大矢知	① 忍藩の大矢知陣屋	忍藩陣屋跡、藩校興譲堂で使用した書籍 62 種・820 冊、湊の土手の松並木
	② 古代朝明郡の郡衙	久留信官道跡、天武天皇造大川御遷拝所跡、耳堂神社、銭ヶ浦、建太川
	③ 仏教文化	垂坂山観音寺、元三大師（慈恵大師）
	④ 中世の城館	大矢知館、大矢知城跡、藤田城跡
	⑤ 東海道と八風道	東海道、八風道、道標、常夜燈、町屋、田村寺
	⑥ 江戸時代からの地場産業	大矢知手延糸織、高橋酒造
	⑦ 獅子舞	立原神社獅子舞、長倉神社獅子舞

	歴史文化の特徴	主な「歴史文化遺産」
8 八 郷	① 先史時代から古代の文化	伊弉岐跡、西ヶ広遺跡、瓦上遺跡、金等橋遺跡、浄ヶ坊古墳群、八幡古墳、石等古墳、松山古墳、金等橋穴墓群
	② 中世の城館	豊生城跡、広永城跡、伊坂城跡、西ノ広城跡
	③ 農村の暮らしの文化	亥の子、こども相撲、旧平田家住宅
	④ 八風道	八風道、道標、遺子のある家
	⑤ 産業と景観	醸造業・製糸業等、三岐鉄道三岐線
	⑥ 二つのダム	伊坂ダム、山村ダム
9 下 野	① 先史時代から古代の文化	中野山遺跡、北山遺跡、広古墳群、持光寺山古墳群、豊谷古墳群、原林古墳群、西ノ山古墳
	② 八風道	八風道、道標
	③ 経塚公園と三賢人	経塚公園、藤井昇善、下田孝三、大賀賢助
	④ 農村の暮らしの文化	こども相撲、どんど
	⑤ 四日市製の産地	梨
10 保 々	① 先史時代から古代の文化	小牧南遺跡、丸尾遺跡、華ヶ崎西遺跡、華ヶ崎古墳群、公事出古墳群、門ノ上古墳群、道具林古墳、若宮古墳群 大塚寺、浄蓮寺、行円寺、円覚寺、少科寺、大塚寺附屋 瓦葺大沢神跡、保津大沢神跡、大塚若狭 120 帖・弘法開闢・広山和泉遺跡
	② 中世の寺院	
	③ 中世の城館	保々西城跡、市場城跡、中野城跡、保々の首塚
	④ 農村の暮らしの文化	天香家文書、市場町獅子舞、地蔵盆
11 三 重	⑤ 八風道	八風道、道標、神崎の常夜燈
	① 今に伝わる地名の由来	足洗池、ヤマトタケルノミコト、大海人皇子、地名
	② 先史時代から古代の文化	大谷遺跡、落河原遺跡、貝野遺跡、御池古墳群
	③ 暮らしと祭礼行事	御池の獅子舞、生桑長松神社の大鏡餅神事、獅子舞、みくわまつり、服部家住宅
	④ 近代の公共建築物	三重郷土資料館（旧三重村役場書庫）、生桑水源地
⑤ 特色ある自然環境	御池沼沢植物群落	
12 県	① 農村の暮らしの文化	伝承・昔話、郷土料理
	② 学者、俳人（旧派・新派）を生んだ地	久保三水、俳人・歌人
	③ 人の往来 道標 22 基	道標
	④ 板並木と壘	竹谷川の板並木、壘
	⑤ 古代の遺跡 須恵窯、瓦生地	陶山古窯跡群
	⑥ 中世の城館 平尾城跡	平尾城跡
	⑦ 四日市製の産地	梨
13 桜	① 智積堂水	智積堂水、三十三間筒
	② 特色ある自然環境 東海地方固有種の自生	桜町シデコブシ群落、オシドリ越冬地
	③ 古代史の舞台 智積庵寺	智積庵寺
	④ 暮らしと祭礼行事 獅子舞	獅子舞、椿岸神社獅子頭
	⑤ 蕨野道と巡見道	蕨野道、巡見道、道標
	⑥ 地場産業 醸造文化と幻の製陶業	醸造（石川酒造、伊藤酒造）、板焼
14 川 島	① 伊勢三郎義盛の首塚	伊勢三郎義盛、三郎塚、墓（西福寺）
	② 特色ある自然環境 鹿化川と東海地方固有種	鹿化川板並木、シデコブシ自生地、壘
	③ 恵まれた気候風土と産業	伊勢茶、たけのこ、地下水、通り酒屋
	④ 算額奉納	神明神社の算額
	⑤ 近代産業	三重紡績所
15 神 前	① 中世寺院	大日寺、大日如来坐像、観音寺、欣浄寺
	② 先史時代の遺跡	永井遺跡、上畑遺跡
	③ 自然豊かな里山	曾井山、大日山
	④ 農村の暮らしと祭礼行事 五穀豊穡の祭り	獅子舞、亥の子
	⑤ 大切にされる伝承	和服式部化粧の水、井原石、夜泣き石、蕨草谷
16 常 盤	① 先史時代から古代の文化	北中寺遺跡、宮の西遺跡、小判田遺跡
	② 中世の城館 三日平氏の乱	松本城跡
	③ 赤堀三家	赤堀城跡
	④ 最も歴史の長い製薬会社	那松堂製薬（加藤那松堂）
	⑤ 東海道	助郷、道標、町家建築
	⑥ 戦争遺跡	誓元寺奉安殿

	歴史文化の特徴	主な「歴史文化遺産」
17 四 郷	① 近代産業発祥の地	伊藤小左衛門、伊藤伝七、藤道・製茶・製糸関係、旧四郷村役場
	② 中世からの寺社と信仰文化 伊勢安国寺	伊勢安国寺跡、願正寺、日野神社、仏像、西日野・東日野大念仏
	③ 農村の暮らしの文化 三大祭	大念仏、虫送り、獅子舞
	④ 風致地区と豊かな自然	風致地区（春の丘、夏の花畑、秋の小径）、カスミサンショウウオ生息地
	⑤ 三重軌道からあすなろ鉄道へ	三重軌道、あすなろ鉄道
18 小 山 田	① 矢田監物と寺社	矢田監物の墓、山田城跡、安性寺、晴覚寺、光輪寺、遠生寺
	② 先史時代から古代の文化	宮原遺跡、一色山遺跡、穴塚古墳群、大塚野古墳群、和田ヶ平古墳群、赤池古墳群
	③ 農村の暮らしと農業を支える技術	伊勢茶、獅子舞、どんと、マンボ、ため池、水沢・笠ヶ山野境紛争の判決文書
	④ 特色ある自然環境	和無田池のヒメコウホネ、大樫、加富神社社叢
	⑤ 本草学	鎌井松石
19 水 沢	① お茶の栽培と人々の暮らし	伊勢茶、冠山茶の木原、茶畑の風景、瀬戸用水、辻久善、お諏訪おどり、太鼓踊り
	② 景勝地 もみじ谷	宮原峠、もみじ谷
	③ 希少動植物の棲む自然環境	シデコブシ群落、カモシカ、不動滝、水晶山
	④ 中世の城跡	水沢城跡
	⑤ 巡見道・巡礼道	巡見道・巡礼道、道標
20 日 永	① 東海道 間の宿と日永の過分	東海道・伊勢街道、日永の過分、日永の過分鳥居、間の宿、日永うちわ、足袋、なが旗、道標、日永一室塚、名馬の一本松
	② 復活「日永梅林」	日永梅林、南部丘陵公園
	③ 古墳文化	茶臼山古墳群、出土品
	④ 信仰と祭礼行事	つんつく踊り、夏越の大祓（輪くぐり神事）、獅子舞、東海道沿いの寺社
	⑤ 戦争遺跡と急速な都市化	燃料廠埋設施設跡、海軍燃料廠官舎
	⑥ 工場地帯（コンビナート）	第1コンビナート、コンビナート夜景
	⑦ 鉄道	三重軌道（あすなろ鉄道）
21 塩 浜	① 祭礼行事	磯津の船船行事、獅子舞、狐の嫁入り道中、福豆まき
	② 漁業と暮らし	塩作り、みくわ
	③ 参宮下街道（浜街道）	参宮下街道、道標、常夜燈
	④ 工業地帯（コンビナート）	第二海軍燃料廠、第1コンビナート、コンビナート夜景
	⑤ 鉄道	貨物輸送鉄道専用線
22 内 部	① 東海道	杖衝坂、松尾芭蕉、うづべ町かど博物館
	② 記紀神話の舞台	ヤマトタケルノミコト、杖衝坂、血葺社、三重の采女
	③ 古墳文化	北小松古墳群、山川古墳群、菅野古墳群、西野古墳群、大塚外古墳群、西紀古墳群、五百山古墳群、八幡等古墳
	④ 中世の城館 采女城跡	采女城跡、成海寺
	⑤ 中世の寺院	上品寺、観音寺、中山寺
	⑥ 暮らしと祭礼行事	小許神社（粥試し神事）
	⑦ 鉄道	三重軌道（あすなろ鉄道）
	⑧ 内部川と丘陵の豊かな自然	内部川、東海丘陵湧水源地群の特有の動植物
23 河 原 田	① 伊勢街道	道標、常夜燈
	② 信仰と祭礼行事	天王祭、獅子舞、蟹島山東元院（蟹薬師密藏院）
	③ 古来よりの自然災害	鈴鹿川、内部川、災害の歴史
	④ 忘掃處	忘掃處
	⑤ みかん山	みかん、熊沢市兵衛
24 楠	① 楠（くすのき）氏による統治	楠城跡、正覚寺
	② 地場産業	宮崎本店、ハマグリの畜養
	③ 旧庄屋岡田邸	岡田邸（楠歴史民俗資料館）
	④ 暮らしの信仰、祭礼行事	船船行事、神興道御行事、湯の花神事
	⑤ 砂浜の自然—吉崎海岸—	吉崎海岸、ハマヒルガオ、アカウミガメ、蟹、シロチドリ

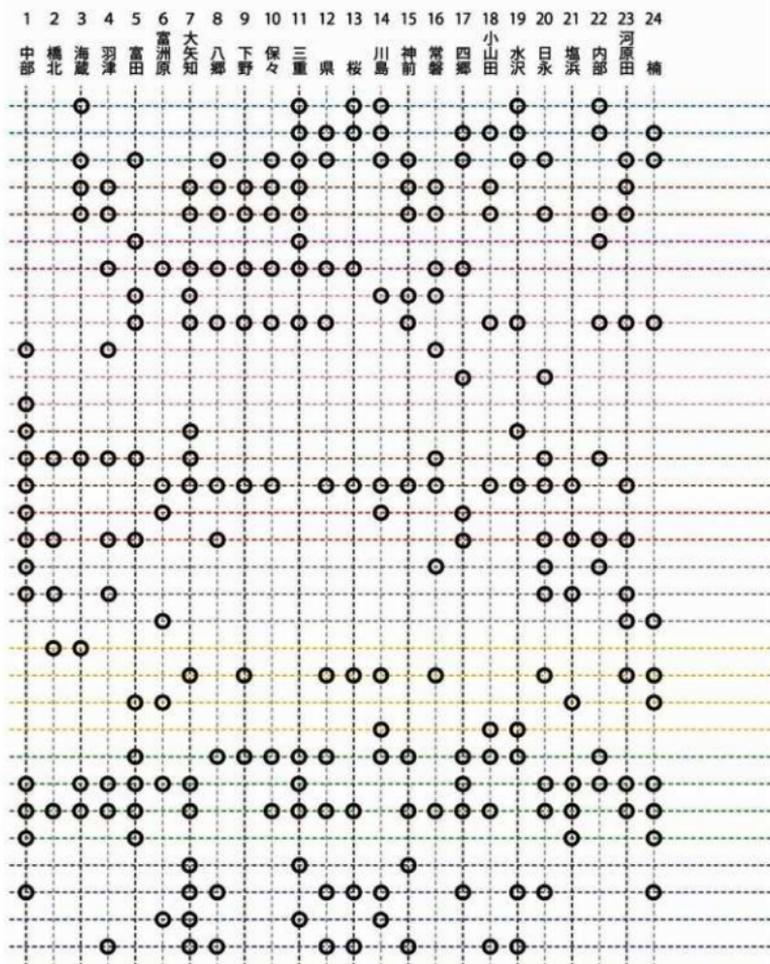
3. 四日市市の歴史文化の特徴

地区ごとに捉えた歴史文化の特徴を踏まえ、四日市市の歴史文化の特徴を整理します。

まず、それぞれの地区に共通する特徴を束ねることで、32の小項目を導きました。さらに、総合して広い視点でまとめ10の大項目として整理しました。

四日市市の歴史文化は、海、山、川の豊かな自然とともにあります。歴史をたどると、先史から古墳時代の暮らしを伝える遺跡があり、記紀神話など古代史の舞台ともなっていま

地区ごとの歴史文化の特徴



す。室町～戦国時代には、武士の勢力争いが繰り広げられ、その時期に現代まで伝わる市(場)が始まりました。交通の要衝として、江戸時代には街道が整備され、産業都市として発展しました。戦災や災害で大きな被害を受けましたが、復興をとげ、また、産業や暮らしに根づく祭礼文化、本市の特徴である水とともに築かれた歴史文化は現在まで継承されています。

以下に、項目ごとに歴史文化の特徴を記します。

四日市市の歴史文化の特徴

[小項目]	[大項目]
<ul style="list-style-type: none"> I-① 東海湖と東海地方の固有の植物 I-② 水辺に生息・生育する希少な動植物 I-③ 自然景観 	I 自然とともに生きる海、山、川の恵み
<ul style="list-style-type: none"> II-① 先史時代の人々の営みを伝える遺跡 II-② 古墳に見る地域の情勢 	II 遺跡が伝える人々の暮らし
<ul style="list-style-type: none"> III-① 記紀神話の舞台 III-② 朝明郎の郡家の成立と古代地方社会の発展 	III 古代史の舞台
<ul style="list-style-type: none"> IV-① 伊勢平氏の活躍と伊勢三郎義盛 IV-② 北勢四十八家による勢力争い IV-③ 赤堀三家による統治 IV-④ 伊勢安国寺由来の信仰 IV-⑤ 「四日市」の起こり 	IV いまに伝わる市と武士の支配
<ul style="list-style-type: none"> V-① 幕府と大名による支配 V-② 東海道と四日市宿の繁栄 V-③ 縦横にめぐる街道の往来 	V 街道の往来が生んだ文化と江戸時代の面影
<ul style="list-style-type: none"> VI-① 近代産業の発祥と四日市港の発展 VI-② 鉄道の発達 	VI 産業都市の礎
<ul style="list-style-type: none"> VII-① 戦災を伝える戦争遺跡と復興都市計画 VII-② 港の工業地帯(コンビナート) VII-③ 伝える災害の記憶 	VII 戦後の都市形成
<ul style="list-style-type: none"> VIII-① 四日市萬古焼の発展 VIII-② 自然環境と人の交流が育んだ地場産業 VIII-③ 漁業と関連産業 VIII-④ 伊勢茶の産地 	VIII 地域に根ざした産業
<ul style="list-style-type: none"> IX-① 農村の暮らしを支える文化 IX-② 受け継がれる祭礼行事 IX-③ 守り続けられる獅子舞 IX-④ 鯨船行事 	IX 暮らしに息づく祭礼文化
<ul style="list-style-type: none"> X-① 伝承にまつわる水 X-② 清らかな水が育んだ醸造文化と暮らし X-③ 近代の利水の歴史 X-④ 用水整備による安定的農業の実現 	X 水とともに築かれた歴史文化

I 自然とともに生きる、海、山、川の恵み

本市は、国定公園である鈴鹿山系の緑豊かな森林、丘陵地の里山、河川や湿地、海岸等、多彩な自然環境があり、自然とともに暮らす豊かな生活があります。東海湖（東海湖盆）に由来する湿地には東海地方固有の植物が見られ、海岸や川などの水辺には多様な動植物が生息・生育しています。地区ごとに、特徴的な自然景観が見られます。自然に関する伝承等も多く、現在も市民による自然を守る活動も行われています。

I-①東海湖と東海地方の固有の植物

600～100 万年前、現在の伊勢湾は、河川が流れ、小規模な湖沼が点在する広大な湿地でした。鈴鹿山脈を除く市内のほぼ全域が、東海湖と名付けられたこの湿地に含まれており、湿地周辺では、シラタマホシクサやイヌナシ、シデコブシ等、東海丘陵要素植物と呼ばれる東海地方固有の植物を見ることができます。その他、伊勢湾周辺の地殻変動や気候の変化を考えると、ヤチヤナギ等の貴重な植物もあります。これら植物が残った生育地として、御池沼沢植物群落やイヌナシ・アイナシの自生地、シデコブシ群落があげられます。



御池沼沢植物群落



イヌナシ（東阿倉川）



シデコブシ群落（川島町）

I-②水辺に生息・生育する希少な動植物

市内の川、海岸、水田、湿地には、多様な生物が息づいています。吉崎海岸ではアカウミガメの産卵が見られ、三重県の県鳥で絶滅が危惧されているシロチドリ^{（シロチドリ）}の営巣地としても貴重な海岸です。川や水田、湿地には、カスミサンショウウオや蛭、トンボ、コクガン等が生息しています。また、市内の池にはヒメコウホネが生育する池があり、湿地には弱酸性で貧栄養の環境に適応したミミカキグサやトウカイコモウセンゴケ等の食虫植物が見られます。



吉崎海岸



シロチドリ（「よっかいちの自然」より）



ヒメコウホネ

I-③自然景観

市内には、宮妻峽やもみじ谷に代表される景勝地や地形を活かした忘帰處^{（ぼうきょじょ）}、河川や河岸沿いに整備された桜並木等の自然景観が見られます。四郷地区では、市街地に隣接する豊かな自然を市民に親しまれる憩いの場として保全することを目的に風致地区が指定されています。近年になると、ダム等の人工物と自然とが織りなす新たな景観が作り出されています。



もみじ谷



伊坂ダム

II 遺跡が伝える人々の暮らし

市内では、先史時代より人々の暮らしが始まりました。市内にある旧石器時代から古墳時代までの遺跡からは、それぞれの時代の暮らしを伺うことができます。縄文時代までの遺跡は、内陸部の河川上中流域を臨む台地上に多く位置し、弥生時代には低地を臨む丘陵上に広がり、古墳時代には多くの古墳が市内全域に築造されました。

II-①先史時代の人々の営みを伝える遺跡

旧石器時代の遺跡は、概ね水沢地区を中心とする内部川扇状地面に集中して立地しています。後期旧石器時代のナイフ形石器群が、内戸谷B遺跡や宮藏遺跡・宮ノ上遺跡・西野遺跡等で確認されています。縄文時代の遺跡は、東北山A遺跡で草創期の有舌尖頭器が出土しています。また、小牧南遺跡では縄文時代中期の堅穴住居が見つかっています。

弥生時代には、前期の大谷遺跡や永井遺跡をはじめ、市内のほぼ全域にわたり、河川に沿った低地を望む丘陵上に集落が営まれるようになります。また、伊坂町では銅鐸が出土しており、弥生時代中期に銅鐸祭祀が行われていたことを示しています。



ナイフ形石器 (四日市市立博物館資料より)



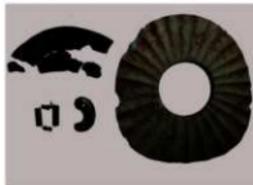
有舌尖頭器 (内戸谷A遺跡)
(四日市市立博物館資料より)



銅鐸 (伊坂町出土)

II-②古墳に見る地域の情勢

市内には、200基を超える古墳があります。市内唯一の前方後円墳として、4世紀後半の志氏神社古墳(大宮町)があります。5世紀の古墳は、方墳をはじめとする広古墳群等が朝明川の流域に分布しています。さらに5世紀末から6世紀にかけて、ほぼ全市域に群集墳が築造されました。この時期の古墳は棺をそのまま埋葬する木棺直葬墳で、5世紀末に生産が開始された須恵器が副葬されました。6世紀から7世紀にかけては、横穴式石室をもつ古墳群や、横穴墓群が多く造られるようになります。



志氏神社古墳出土品



八幡古墳 横穴式石室



御池古墳群出土品
裝飾須恵器

Ⅲ 古代史の舞台

市内には、ヤマトタケルノミコトの伝説が残っています。郡衙が設置され、東国へつながらる要衝となり、壬申の乱や聖武天皇東国行幸等、市内の古代の姿を垣間見ることができます。人々の往来とともに、8世紀から10世紀には、市域の中で仏教文化も広がり、寺院が建立されるなど、古代の地方社会が形成されていきます。

Ⅲ-① 記紀神話の舞台

ヤマトタケルノミコトが東国を平定し、帰途につく途中、病にとりつかれ、伊勢国の三重郡采女あたりまで来たとき、急坂を杖をついてようやく登れたので、その坂を「杖衝坂」と伝えています。『古事記』には「吾が足は三重の勾（まがり）の如くして甚（い）と疲れたり」と、三重の地名の説明が伝えられています。ミコトが亡くなったとき、大きな白鳥と化して、大和をめざして飛び去っていったという伝承があり、富田という地名は、白鳥になって「とんだ」から来ているといわれています。富田の鳥出神社、富田一色町の飛鳥神社は、どちらも鳥が出る、鳥が飛ぶ、と書き、このミコトの伝承から来ているといわれています。また市内には、ミコトが足を洗ったという足洗池も伝えられています。



杖衝坂



足洗池

Ⅲ-② 朝明郡の郡家の成立と古代地方社会の発展

久留倍官衙遺跡は、朝明郡の役所の遺跡で、古代律令国家の地方支配体制を具体的に示すものとしてきわめて重要です。天武天皇元（672）年、壬申の乱の際に大海人皇子が朝明郡家に立ち寄ったと『日本書紀』に記述があり、また天平12（740）年、聖武天皇は伊勢に行幸した際に朝明郡に二泊されたと『続日本紀』にあり、その際に詠まれたという歌が『万葉集』に記載されます。

智積廃寺は市内最古の仏教寺院遺跡で、壬申の乱の功績の証として、天武政権からの援助で建立されたとの説もあります。仏教文化が市域に広がり、その痕跡が点在しています。

また、朝明郡司船木良見の良源に対する帰依寄進により10世紀に建立されたとされる垂坂山観音寺があり、その堂宇の一つとされる大膳寺跡では瓦が出土し、市指定史跡に指定されています。



久留倍官衙遺跡



智積廃寺

IV いまに伝わる市と武士の支配

市内を含む伊勢地域は、平安から鎌倉時代には伊勢平氏が活躍する舞台でした。南北朝時代には、足利尊氏・直義兄弟が伊勢安国寺をこの地に置きました。室町・戦国時代には、いわゆる北勢四十八家と呼ばれる様々な土豪が入り交じって城を築き、市内には約40カ所の城跡が明らかになっています。京都や近江等、様々な地域へとつながる道があったこの地域は、戦略上重要な場所でした。北勢四十八家の中でも、大きな勢力を誇ったのが赤堀三家といわれており、関連する赤堀城跡・浜田城跡・羽津城跡があります。また、室町時代後期には、四日市の地名の起こりとなった定期市が始まりました。

IV-①伊勢平氏の活躍と伊勢三郎義盛

承平5(935)年の平将門の乱の後、将門を討った平貞盛らが伊勢国に移り住み、一族がこの地に定着しました。これが「伊勢平氏」の起こりです。平安から鎌倉時代には伊勢平氏の活躍の舞台でもありました。

源義経の従者、伊勢三郎義盛は三重郡の出身との説もあり、義経が兄頼朝に追われ九州へ向かう途中、鈴鹿山で自刃した、もしくは捕縛され京都で斬首されたといわれ、川島の西福寺境内に義盛のものと伝わる墓があり、近くの畑には首塚があります。

鎌倉時代初期の元久元(1204)年には、伊勢・伊賀の平氏の一族が守護山内首藤と対立蜂起し「三日平氏の乱」と呼ばれました。その際に日永、松本、高角に城が築かれ、また富田には居館があったとされています。



伊勢三郎首塚

IV-②北勢四十八家による勢力争い

戦国期の北勢地方には大きな勢力の武将は存在せず、近世の軍記に記載される「北勢四十八家」といわれる小規模の土豪が城を構え、争いを繰り返していました。この時代の城の多くは、周囲に空堀を巡らせ、土塁で周りが囲まれたものです。小高い山や丘の上に建てられ、周囲が見渡せ、攻められにくい立地でした。一方で、平地に造られた城もありました。

織田信長の北伊勢侵攻が永禄11(1568)年にありました。信長の家臣、滝川一益が率いた大軍により、多くの武将は軍門に下り、織田氏に服属して近世的武士団を形成しました。



栗女城跡

IV-③赤堀三家による統治

応永年間(1394~1428)、田原孫太郎景信が上野国赤堀庄(現在の群馬県)から三重郡栗原に移り、その際に地名を赤堀と改め、自身を赤堀肥前守と称し、赤堀城を築いたとの伝承があります。文明年間(1469~1487)に三家に別れ、景信は、長男の盛宗を羽津に、次男の秀宗を赤堀に、三男の忠秀を浜田に配し、赤堀三家は北勢地方で勢力をもったと伝えられています。市内には羽津城跡(市指定史跡)、浜田城跡(市指定史跡)、赤堀城跡があります。



浜田城跡

IV-④伊勢安国寺由来の信仰

安国寺は、夢窓疎石の勧めにより、南北朝時代に足利尊氏・直義兄弟が後醍醐天皇をはじめ、元弘の変以降の戦没者の冥福を祈るための寺院で、利生塔と一組で全国に造られました。伊勢安国寺（西日野町）は、『勢陽雜記』によると、虎関師錬が暦応2（1339）年に建立、安国寺の勅号を得たものとされます。その前身寺院は延暦19（800）年創建の五位鳥山西明寺とも伝えられます。室町時代には、広大な寺域に僧坊や多くの支院を持ち隆昌を極めました。元龜3（1572）年、滝川一益の兵火により焼失したと伝えられています。

顕正寺（西日野町）は、伊勢安国寺の僧房で兵火を免れた総持庵と伝えられています。寺室には、木造阿彌陀如来坐像等があり、寺内行事が催される際に文化財として公開されています。近くにある日野神社には、西明寺の本尊であったとみられる等身大の阿彌陀如来坐像が伝えられています。

薬師堂（日永）の薬師如来坐像は、もとは伊勢安国寺の像で、炎上の際、近隣の実蓮寺に移り、その後現在地に安置されたと伝えられています。



伊勢安国寺跡



阿彌陀如来坐像（顕正寺）



薬師如来坐像（薬師堂）

IV-⑤「四日市」の起こり

室町時代には、赤堀三家の三男である田原美作守忠秀が、領内の農業や手工業を盛んにし、商品の流通を図るため、東海道を浜田城の東側に移して、交通の便を良くするとともに、その北寄りに十字の大道を作り、市を形成したとの伝えがあります。

文明5（1473）年の神宮の「外宮庁宣案」に「四ヶ市庭浦」の名称があり、市と湊があったことが分かります。室町時代後期には、四日市と称して毎月4日・14日・24日の3回定期市が始まり、これが四日市の地名の起りといわれています。こうした四日市の発展には、海陸両路の交通の便が良い等、四日市の地の利が大きく影響していると考えられます。



四日市庭浦の復元模型（四日市市立博物館資料より）

V 街道の往来が生んだ文化と江戸時代の面影

江戸時代、四日市は天領となり、代官が配置され、慶長6（1601）年には東海道の宿場町に指定されます。市場町・湊町の四日市に「宿場町」、「陣屋・代官所の町」といった性格が加味され、北勢の行政・商業の中心地として知られるようになります。海上交通においても多くの廻船が行き交い、東海道を起点に周辺地域へつながる街道が発達し、参勤交代や伊勢参宮等、往来がますます活発になりました。現在も街道沿いには「文化財」が残り、江戸時代の往来を感じることが出来ます。

V-①幕府と大名による支配

本能寺の変のときに、和泉国（大阪府）の堺にいた徳川家康が、伊賀を越え、三河国に帰るためにたどりついたところが四日市の浜辺だと伝えられています。橋の上で、陸路にしようか海路にしようか考えを巡らせていたため、その橋は「思案橋」（現在の浜町・蔵町辺りと推定）と呼ばれています。家康自身が交通の要衝であると認めたため、江戸幕府が開かれると、四日市は天領として陣屋が置かれ、代官が配置されました。

文政6（1823）年、桑名藩では久松松平氏が入封し、奥平松平氏は武蔵国忍へ転封し、桑名藩内の員弁郡・朝明郡・三重郡の一部地域4万3千石は忍藩に組み替えられることになり、忍藩の飛地となりました。そのため忍藩は、大矢知村に陣屋を構えました。また、江戸時代の水沢は、菟野藩に属しており藩主土方氏が景勝の地もみじ谷の保全に尽力したといわれています。藩主が領内巡視の際、水沢の常願寺に立ち寄り、この寺でお茶を飲み、この村の茶業を奨励したともいわれています。



思案橋

V-②東海道と四日市宿の繁栄

東海道五十三次のうち43番目の宿として栄えました。本陣や宿駅も設置され、天保14（1843）年には本陣2軒、脇本陣1軒、旅籠98軒がありました。「四日市宿本陣清水家文書」は、江戸時代を通して四日市宿の一番本陣を務めた清水家に伝わった文書群で、本陣の経営や実態がわかる史料です。幕末になると内海船が四日市に進出し、四日市湊は江戸と京との水陸連絡地点として重要な商業港となり、瀬戸内海や横浜を結ぶ北勢の商業の中心地となりました。現在も、東海道沿いには、歴史的建造物（町家）の町並みが残り、日永一里塚跡等、往時の人々の往来を伝える文化財が数多く点在しています。



日永の町並み



四日市宿本陣清水家文書



日永一里塚跡

V-③縦横にめぐる街道の往来

市内を海に沿って南北に縦断する東海道を起点として、いくつもの街道が整備されました。それら街道は、四日市と周辺地域との人と物の往来を活性化するとともに、江戸や都への往来ルートとなりました。街道沿いには道標や常夜燈等の文化財が数多く残り、往時の往来の様子を伺うことができます。伊勢街道や塩浜地区を抜ける参宮下街道は、伊勢神宮へつながります。巡見道とは、江戸時代に幕府の巡見使の通った道のことで、八風道は、鈴鹿山脈の八風峠を越え、現在の滋賀県に続き、東海道と中山道の短絡路となっていました。菟野道は、東海道四日市宿と菟野一万石の城下を往来する道で、城下町や湯の山を訪れる旅人や参勤交代で江戸に向かう菟野藩主も通りました。

VI 産業都市の礎

近代に入ると、西洋からもたらされた技術や機械による産業が興り、四郷地区は近代産業発祥の地の一つでした。四日市港の整備により国内外へとお茶や生糸等の製品が次々と輸出され、商業のまちから産業都市へと発展していきました。鉄道の発達も産業の発展を支え、現在につながる産業都市の礎が築かれました。

VI-①近代産業の発祥と四日市港の発展

幕末から近代にかけて、市域の各地で近代産業の萌芽が見られ、とくに四郷地区では醸造、製茶、製糸その他の関連産業が盛んになり、本市の近代産業発祥を考える上で重要な地域といえます。

5世・6世伊藤小左衛門や9世・10世伊藤伝七は、工場の機械化や海外への輸出等、産業の近代化という時代の流れを読み取り、特に10世伝七は近代日本経済の父といわれる渋沢栄一の支援を得る等して事業を拡大し、起こしたいくつかの企業は現代にも継承されています。また、5世小左衛門は学校の創設、10世伝七は旧四郷村役場の役場建設の寄付等でも地域社会に大きく貢献したことから、今でも住民に敬われる存在となっています。

四郷の産業は、四日市港とともに発展しました。明治6（1873）年、稲葉三右衛門らは四日市港築造工事に着手し、明治32（1899）年に伊勢湾で最初の開港場に指定されると、紡績をはじめ、製茶、製糸、漁網、製陶、菜種油（伊勢水）等、さまざまな製品の輸出拠点となり、近代産業の発展を支えました。



5世伊藤小左衛門



10世伊藤伝七



旧四郷村役場



稲葉三右衛門

VI-②鉄道の発達

明治23（1890）年、市街地東縁に関西鉄道（現・JR関西本線）の四日市駅が開業しました。それまでの町の中心は、宿場町として東海道沿いでしたが、鉄道の開業により次第に四日市駅と諏訪神社を結ぶ地域へと移っていき、発展していきました。

大正元（1912）年には、商工業が盛んであった四郷村と四日市を結ぶために、三重軌道（現、四日市あすなろ鉄道八王子線）が八王子まで開業しました。その支線（鈴鹿支線）として、大正11（1922）年に日永から内部まで延伸され、三重軌道内部線も開通しました。大正13

（1924）年に伊勢電気鉄道（現、近鉄名古屋線）津 - 四日市間が開業、関西鉄道と平行する形で現在のJR四日市駅前へ乗り入れました。また、四日市鉄道が湯の山温泉への遊覧客輸送等を目的に大正2（1913）年、現在の近鉄湯の山線を開業しました。さらに四日市港へのセメント輸送を主目的として、昭和6（1931）年に三岐鉄道三岐線（富田～西藤原駅）が開通しました。

市内の鉄道網は、まず産業関連輸送を主目的に整備され、次第に旅客輸送が増加してきました。



関西鉄道四日市駅（明治30年頃）〔四日市市史〕

Ⅶ 戦後の都市形成

海軍施設や軍需工場が立地していた本市は、第二次世界大戦で大きな被害を受けました。戦災により多くの「歴史文化遺産」が失われましたが、それを乗り越え都市を形成しました。中心部では、戦災復興都市計画により道路や公園・緑地等が整備され、海軍燃料廠の跡地を中心に工場誘致を行い、コンビナートが形成されました。大きな公害の発生を乗り越え、産業と環境保全を両立したまちづくりが行われています。本市は水害との戦いの歴史も持っており、川の氾濫や沿岸部での伊勢湾台風による大きな被害も受けています。

Ⅶ-①戦災を伝える戦争遺跡と復興都市計画

昭和20(1945)年6月18日の四日市空襲では、大きな被害を受け、当時の市域の35%にあたる3.18㎓が焼失しました。臨海部に立地する第二海軍燃料廠と周辺の軍需工場が攻撃目標でした。現在、鶴の森公園内には四日市空襲殉難碑が設置され、毎年戦災死者の追悼が行われています。

本市は、空襲等で破壊された都市の復興のために策定された戦災復興都市計画に沿って、当初計画より縮小されたものの、2.61㎓の範囲におよぶ戦災で廃墟となった都市の復興を行いました。中心部では、現在の近鉄四日市駅とJR四日市駅を結ぶ大通りや区画街路、公園・緑地等が整備されました。その大通りでは、昭和27(1952)年に講和記念全日本農機具・新日本産業大博覧会が1ヶ月間開催され、入場者数は約80万人に及んだとされています。また、昭和30(1955)年には全国高等学校野球選手権大会で四日市高校が初出場初優勝する等、復興から高度成長に向けて四日市市民の大きな励みになりました。



戦災復興事業により完成した70m道路(1952年頃)
(『四日市市史』)

Ⅶ-②港の工場地帯(コンビナート)

第二次世界大戦後、工業都市のプランが描かれ、市では積極的な工場誘致政策が行われました。昭和34(1959)年に、海軍燃料廠の跡地に日本で最初の大規模な石油化学コンビナートが塩浜地区に誕生したのを端緒として、午起地区、霞ヶ浦地区の水面を埋め立て、それぞれ第2、第3コンビナートが稼働しました。

これらの石油化学工場は高度経済成長を歩み出した日本経済の象徴ではありましたが、排出された硫黄酸化物による大気汚染や水質汚濁、悪臭等の大きな公害が発生しました。現在は、環境が改善され、産業の発展と環境保全を両立したまちづくりへの取組みを行っています。また、美しい工場夜景観光としてクルーズ船が遊覧する等、観光資源としても活用されています。



工場夜景

Ⅶ-③伝える災害の記憶

昭和34(1959)年9月26日に上陸した伊勢湾台風は、本市に大きな被害をもたらしました。富田一色海浜緑地公園内には伊勢湾台風殉難慰霊碑が建立され、毎年、慰霊献花式が行われています。

また、水が豊かな本市では、一方で水害との戦いの歴史が繰り返されてきました。河原田地区では、万治2(1659)年の内部川、鈴鹿川の大洪水により、川沿いの村が大きな被害を受け、村の場所を移したと伝えられています。楠地区には、水害に関わる昔話「三人人」が伝えられています。



伊勢湾台風殉難慰霊碑

Ⅷ 地域に根ざした産業

市内では、それぞれの地区で地域に根ざした地場産業が生まれ、継承されています。萬古焼や日永うちわ、製菓業等は、古くから東海道や四日市港、鉄道による往来や流通により、発展してきました。その他にも、温暖な気候や豊かな水を活かした醸造や素麺づくり、お茶、梨、みかんの栽培、漁業から発展した漁網や水産加工などがあります。

Ⅷ-①四日市萬古焼の発展

萬古焼は、江戸時代中期に桑名の豪商・沼波弄山によって始まりました。弄山が亡くなると、一時前途絶えましたが、末永村の村役だった山中忠左衛門は、東阿倉川の唯福寺住職田端教正の海蔵庵窯から手ほどきを受ける等、20年の研究の末、明治6（1873）年に四日市萬古焼の陶法を確立させ、村人に道具と陶土を与えて指導し陶工を育成しました。

四日市港や鉄道の整備に伴い、国内だけでなく、海外への輸出も盛んに行われ地場産業としての基盤が築かれました。港があり、貿易港として流通に適していたこともあって、全国有数の陶磁器の産地として発展を遂げました。

その後、時代に合わせて特色ある陶磁器を生産しています。昭和54（1979）年、「四日市萬古焼」は当時の通商産業大臣から伝統的工芸品として指定されています。毎年、5月の第2土・日曜日には、「四日市萬古まつり」が開催されています。



林コレクション萬古焼

Ⅷ-②自然環境と人の交流が育んだ地場産業

本市の気候や豊かな水を背景に、また街道を行き交う人々との交流を活かして、地場産業が生まれ発展してきました。

大矢知地区では、鈴鹿おろしと朝明川の清流という気候と風土に恵まれ、かつ豊富な小麦を近隣地域から調達できたことから、江戸時代末期から素麺作りが盛んに行われ、明治初期に灘式の本格素麺作りが開始されました。

江戸時代、農閑期に農家の人々が副業として作り始めた日永うちわは、お伊勢詣りの土産物として好評を博していました。東海道を往来する多くの人の中、茶屋や旅籠が軒を連ねて賑わい、日永うちわ・なが餅・日永足袋は日永の3大名物と呼ばれました。

また、常磐地区にある製菓業の加藤翠松堂は、室町時代末期の元亀元（1570）年に創業し、江戸時代には、時の閑白二条家より直参調業所としてのお墨付きをもらい、「二条殿御業所」として宮中をはじめ、全国的に秘伝の民間業や漢方薬を販売していました。



大矢知素麺



日永うちわ

Ⅷ-③漁業と関連産業

海岸部では漁村が形成され、明治期以降、漁業技術が発展してきました。近海での底引き網や船引き網漁業が中心で、ヨシエビ・ガザミ・イワシ・コウナゴ等が水揚げされています。植地区ではハマグリやアサリ等の蓄養が盛んで、出荷高日本一を誇っていましたが、近年出荷量が激減しています。漁業を背景に漁網製造は江戸末期から富田、富洲原地区を中心として発達してきました。現在も、日本の水産業を支える漁網生産の拠点となっています。また、磯津、天カ須賀では水産加工が盛んです。



富洲原（富田一色）の町並み

Ⅷ-④伊勢茶の産地

水沢、小山田、川島では茶畑が広がり、伊勢茶の栽培が行われています。これらの地域は土地の水はけがよいこと、雨量が豊富で温暖な気候であること等、お茶づくりに適した気候・土地です。

水沢のお茶は延喜年間（901～922）に、飯盛山浄林寺（現一乗寺）の住職が、空海が唐から帰国した際に持っていた茶の実を、雲母峰の南側にある冠山茶の木原（市指定史跡）に植えたことが始まりといわれています。

江戸時代にお茶の栽培は減少しますが、江戸後期に常願寺の住職、中川 教宏（きょうこう）によって再興されました。教宏は宇治の茶業を見て帰村し、まず水沢三本松の大畑に茶園を作ります。さらに宇治から良質の茶の実を持ち帰り植栽し、茶師を招いて技術を高め、普及させることによって水沢の茶業の振興に努めました。



茶畑の風景

Ⅹ 暮らしに息づく祭礼文化

市内では、暮らしや生業と密接に結びついた信仰にもとづいた多様な祭礼文化が生まれ、受け継がれてきました。それぞれの地区では、年中行事や人生儀礼、食文化等が地域のつながりを支えています。祭礼行事として、四日市祭や石取祭等では特徴的な山車が奉納され、雨乞いを願う太鼓踊りや念仏行事である大念仏等、地区によって多様です。獅子舞は北勢地方の流れをくむ特徴的なもので、かつては市内で広く行われていました。鯨船行事は、地域内外から多くの人が訪れる祭礼行事となっています。

Ⅹ-①農村の暮らしを支える文化

農村では、日常の食文化に加え、一年間のサイクルをつくる年中行事、一生の中で人生儀礼等が、人々の暮らしを彩るとともに、地域のつながりを支えてきました。

郷土食、正月行事である大鏡餅神事や粥試し神事、害虫駆除・五穀豊穡を願う虫送り、地藏盆等の盆行事、亥の子等、現在にも継承されています。

Ⅹ-②受け継がれる祭礼行事

「四日市祭」は、江戸時代の初期の創祀と考えられる諏訪神社の例大祭です。第二次世界大戦の戦災によって、多くの山車を失う等して衰退したものの、伝統的な祭礼を復活させようと、平成9（1997）年から「秋の四日市祭」として毎年10月に開催されています。

一方、昭和39（1964）年から始まった「大四日市まつり」は市民祭として毎年8月に開催され、「郷土の文化財と伝統芸能」と題して、「大入道」等、市内各地のネリや山車等の演技が披露されます。

山車は市街地のほか、日永、馳出等、街道沿いを中心として存在しました。水沢に伝えられる雨乞いを願う太鼓踊り等、各地には古くからの伝統を持つ踊りが受け継がれています。桑名市で発達した石取祭は、明治時代以降、桑名で祭車を新造すると、その古車を買い求めた地に広がって、現在も富田・富洲原で実施されています。念仏行事としては、東日野町・西日野町に伝わる大念仏があります。



岩戸山

Ⅹ-③守り続けられる獅子舞

北勢地方では、獅子舞が生活の中に息づいており、氏神の祭礼に獅子舞を奉納しているところは絶えてしまったところも含めると市内では40力所余りに及びます。市内でみられるのは、囃子と口取りが舞う神楽獅子舞と、神楽獅子舞に曲芸等の放下芸を取り入れた大神楽の二つの系統に大別できます。

神楽獅子舞は、鈴鹿市に本拠がある箕田流、山本流、中戸流が、現在も各神社で、その伝統を守り継がれています。

室町時代に始まったとされる伊勢大神楽は、阿倉川がその発祥地の一つで諸国を巡ったとされています。また、東日野の獅子舞のように一定の神社に属さないで、複数の神社に奉納するものもあります。



約60年ぶりに発祥の地の一つ海蔵神社で奉納された伊勢大神楽

Ⅹ-④鯨船行事

本市を中心とした北勢地方のみに分布する、陸上の模擬捕鯨行事です。鯨船行事のある各地域は、いずれも鯨の獲れる地域ではありませんが、鯨を豊饒の象徴とみなし、これを仕留める演技を行うことによって大漁や富貴を祈願した行事です。

4艘の鯨船山車が継承されている富田地区の鳥出神社の鯨船行事は、国指定重要無形民俗文化財でありまたユネスコ無形文化遺産に登録されています。県指定文化財では、南納屋町の鯨船山車、市指定では磯津の鯨船行事と南楠の鯨船行事があります。また、指定外では勢州組（新勢丸）もあります。



南楠鯨船行事

X 水とともに築かれた歴史文化

本市では、豊かな水を恵みとして活かし、人々の暮らしや産業を育んできました。伝承にまつわる場所として地区で大切にされる水辺は各所にあり、清らかな水を活かした醸造文化も特徴です。同時に、豊かな水を暮らしに活かすための治水・利水の歴史もあります。用水や上下水道等の技術が、安定的な暮らしや農業の発展にも大きく寄与しています。

X-①伝承にまつわる水

市内には、様々な伝承をもつ水辺が多くあります。ヤマトタケルノミコトが手を洗った手洗い池（北野町）、疲れた足を洗った足洗池（西坂部町）、聖武天皇が池に顔を映したという鏡ヶ池跡（蒔田一丁目）、和泉式部が顔を洗ったという化粧の水（曾井町）があります。また、弘法大師が清水を湧かしたという井戸が各所にあります。ほかに、四日市を表す言葉に「酒水」があり、その起源ともされる「酒水の井戸」（北町）があります。

X-②清らかな水が育んだ醸造文化と暮らし

本市では、「伊勢米」と呼ばれる全国の米相場を左右したほど良質な米の産地であったことに加え、清らかで水量豊富な伏流水が鈴鹿山脈から流れ込み、冬の鈴鹿おろしと呼ばれる寒風が吹き下ろし最適な気候に恵まれ、良質な地酒が造られてきました。また、味噌・醤油等の醸造も行われ、全国的に流通するものもあります。現在も水道水源の6割が地下水を利用しています。



石川酒造（国登録有形文化財）

X-③近代の利水の歴史

四日市港の外国航路開設に伴い、船舶への給水施設の必要から、大正3（1919）年「四日市給水株式会社」が設立され、生桑町に本市初の水源池が設けられました。

それでも、市民のほとんどは井戸水に頼っていましたが、衛生面重視の風潮から、昭和3（1928）年に本市は四日市給水株式会社の施設を買収を受けて、本格的な上下水道事業を始めました。

旧富洲原町においても昭和3（1928）年6月～昭和4（1929）年4月、大矢知村に水源池を建設して上下道を布設しました。その後、富洲原町の合併によって、水源池としては、生桑水源池とあわせて2水源により給水されるようになりました。



旧富洲原町上下水道大矢知水源池（濾過機器）

X-④用水整備による安定的農業の実現

市内には水に恵まれず、干ばつの被害に見舞われている地域もありました。灌漑事業は過酷な条件で行われることもあり、サイホン式水路、マンボ、三十三間筒等が活用されてきました。

水沢地区は水の便が悪く、水不足により田畑はもとより、飲み水にも困っていましたが、江戸時代初期、村名主 辻久善が村人と協力し長い年月をかけて全長2kmに及ぶ「瀬戸用水」を完成させ、現在も水沢中の田を潤しています。お諏訪おどりは、諏訪社に水神として祀られた辻久善の功績をしのび、お礼に踊り始めたといわれています。

智積養水は環境省選定の「名水百選」に選ばれ、鯉が泳ぐ清流は地域の誇りとなっています。羽津用水は大矢知街道に並行して流れ、まちなかの景観に寄与しています。



お諏訪おどり



智積養水

第5章 計画作成に向けた市民意識の調査

本計画作成にあたり、市民の「文化財」に対する意識や関わりに関して、現状や課題を把握するために、アンケート調査を実施しました。

1. 地区アンケート調査

地区ごとのヒアリングにあわせて、「文化財」に関する意識についての設問（主に選択式）を設け、アンケート調査を実施しました。 ※資料編 p 167～168 参照。使用用語は質問時のもの。

実施時期：令和2（2020）年10月～11月

実施方法：市内24地区で、主旨の説明とともにアンケート用紙を配布し（10月）、その後、アンケートの回収及び回答内容についてヒアリングを実施した（11月）。

対象者数：24地区それぞれで中心的に取組みを行っている方（5名程度）

回答者数：64名

〔歴史文化に関する意識に対する回答の概要〕

■地区で保存・活用に取り組むにあたっての課題（3つまで選択）

最も多いのが「担い手・後継者の育成」(66%)で、次いで「価値の地区内での共有」(45%)「建物や道具を維持」(41%)、「情報発信の充実」(41%)が多くあげられました。地区における担い手を増やし、多様な課題に対応していく必要があります。

■地区での保存・活用に取り組むに必要な支援

「金銭的支援」(56%)、「文化財の価値の明確化」(55%)、「人材育成」(49%)が多く回答されています。行政をはじめとして専門家や企業・団体等が協力して支援をしていく必要があります。

■歴史文化資源が四日市市にもたらす効果

「過去から未来へ歴史を受け継ぐ」(59%)、「地域の誇りや活力になる」(58%)、「住民同士のつながりが強まる」(53%)、「教育や生涯学習等の学びとなる」(53%)が多く回答されています。これらを文化財の持つ価値として活かすよう、保存・活用に取り組んでいく必要があります。

■歴史文化資源の保存・活用の取組みで認知しているもの

「市史や刊行物」(59%)、「遺跡公園等の整備」(45%)、「文化財の指定・登録、補助金」(44%)、「講座や講演会」(42%)は多く回答されました。一方で、半数以上が知らないという状況であり、積極的な周知が必要です。

■歴史文化資源の保存・活用について力を入れるべき取組み

「有形文化財の保存や修理」(56%)、「担い手の育成や学びの場の充実」(53%)、「小中学校等の地域教育の充実」(50%)は多く回答されています。保存・活用のテーマとなります。

2. 市民アンケート調査

「文化財」の保存・活用に対する広く市民のご意見を聞くために、市政ごいけんばんでモニターとして本市でアンケートを実施しました。

※資料編 p 169～171。参照使用用語は質問時のもの。

実施時期 令和3（2021）年11月12日～11月24日

実施方法 モニターとして登録している市民を対象にインターネットを通じて回答

対象者数 397名（アンケート案内メール送信者数）

回答者数 208名（回答率52.4%）

〔回答の概要〕

■四日市市の文化財（歴史文化資源）への関心

「関心がある」（31.3%）、「どちらかといえばある」（44.7%）と回答した人は合わせて76.0%であり、関心を持っている市民が多いと言えます。

■四日市市の文化財（歴史文化資源）に関心がある理由

「貴重で、未来へ継承すべきもの」（64.6%）、「寺社仏閣や彫刻・仏像等が好き」（53.2%）、「身近で、愛着や誇り、魅力を感じる」（45.6%）、「まちづくりや観光資源として重要」（42.6%）と回答している人が多く、文化財の持つ価値や保存・継承することの大切さを認識する市民が多いことがうかがえます。

■四日市市の文化財（歴史文化資源）に関心がない理由

「自分の生活に関連がない」（52.0%）、「身近に触れることがない」（44.0%）、「時間がない」（33.0%）という理由が多く、四日市市に住みながらも日常的に市の歴史文化とは関りがなく、毎日の生活に忙しく、関心が持てないことが考えられます。

■「四日市市の歴史文化」と聞いて思い浮かぶもの

「東海道等の歴史的な街並み」（66.3%）の回答が多いのは、現在も生活道路として本市を南北に通る東海道が、生活に密着し馴染み深いためと思われます。「久留信官衙遺跡」（47.1%）や「鯨船行事」（45.7%）は「広報よっかいち」の特集に掲載したり、イベントを開催したりする等、情報発信している効果とも考えられます。

■日常生活の中で歴史文化資源に接する機会（複数回答）

「博物館等での展示」（55.8%）、「旅行・観光」（52.4%）の回答のように、外に出ることによって、歴史文化資源に接するという一方、「地域で行われる伝統行事」（40.4%）という身近なところで歴史文化資源に接しているという回答もありました。

■特に重点を置くべきと思うもの

「歴史文化や自然環境の次世代への継承」（63.5%）の回答が一番多く、継承することの大切さを認識していただいています。「地域ごとの特色を生かしたまちづくり」（37.0%）、「日常生活の中で接することができる活用」（31.3%）の回答も多く、地域の特色を生かして身近なところで歴史文化の活用に取り組みでいけるように進めていく必要があります。

■歴史文化資源の保存・活用について力を入れるべき取組み

保存活用のための具体的な取組みとして、「建物や仏像等の保存や修理」（69.2%）、「小中学校等との連携」（38.9%）の回答が多く、形あるものの保存や子どもたちへの継承に向けて学校教育との連携の重要性を理解いただいていると言えます。また、担い手の育成や観光資源、防災・防災への取組みにも力を入れるべきとの回答も多いことから、今後ともこうした取組みに力を入れていく必要があります。